

正史
改正月令博物考
正史部





貝原先生歲時增選
鳥飼洞齋翁編述

改正月令
博物筌 全部

此書吉甲子年彫刻スレトモ
艸稿駁雜ニシテ具傳寫ノ誤
少ナカラス故ニ此度左ニ録スル
諸先生ノ校閲ヲ經テ再訂ナ
シ改正ノ二字ヲ蒙ラシム此書ノ
正シクナリタルヲ好タシテ佳作
ヲ贈給ハルヲ次ニ記ス

章

一年三百六十日
日無邦無故實時令
娛遊及國風偉哉抄
録収細帙

筱應道題

章

採觚箋費細
工夫業就堪
供詞客厨時
令天文盤托



出能魚州木
帙分區蔡箋
它又帳中秘
張說平生掌
裏珠寄語風
流多執子休
為博物小人
儒

南豐題



日初月為是
事浩濶古性
正々備於燦

爛 恆樂

Handwritten notes in cursive script, including the characters '世' and '道'.

水滸竹隈氏 道孝

世より有るはこれなり
中より得るはこれなり
外より入るはこれなり

注と見よわあはこれなり
と成 宙よりあり

とらやうとてぬ
うそのらうとてぬ

華洛
得閑齋筆雅

世より有るはこれなり
中より得るはこれなり
外より入るはこれなり

月や日や花と 井眉

のらやうとてぬ

○俳諧大意並口傳

一此書の詮とどり処の歳時月令の正節と明らかふに改小曆の二十四節禮記之月令と聲小記一草木花実の時日と不差記と詩歌連俳の季節と定るもの相違せりもの何る故小各傍小月々用ゆる印を委しるる也

一連歌俳諧者流小季と定め節と宛むるもの原来懐紙一順の見渡しの為小二條家ふるくその分置るれ小後普光園攝政新式と著し給ひ後常恩寺太閤追加したまひ肖相老人今案と加るられて其式既定よりたえべ和歌小年内立春ハ春されども連俳ハ冬と守杜若ハ和歌ハ春まれども連俳ハ初夏と守の牡丹ハ春も出夏もせり月のあり

連能ハ初夏の景物と定既ハ
宗砌法師の句ハ

春暖々々花のさゆやぬをま
と断りし深き詠有詩と

歌ハ一章一首のみの連歌を
百句はねら名多し誹諧又

式を連歌ハ擬を然る夏冬
のころハ景物少く懐紙乃見

渡りしころハすよめて古今集
の巻頭ハ年内立春われど連ハ

ハ冬と定雪月花の三ッ夏ハ及
ち守故ハ燕子花牡丹を夏

とん中々私ハさむむ事ハ
らハバこそハ草ハ過と

の格ハ御傘ハ草ハ過と
とくハ申されハ本文の内秘授

口尖ハ及んでハ文のわかれを
厭ハ畧せりも多し追て博

物全補遺と出して悉く註と
凡例終

引用書籍目録

此各本文注解トモ一々出處ヲ記
サスト魚トモ一事モモ安リニ筆スルニ
非ス左ノ各ノ内ヨリ抜各ス此各
編述シテヨリ凡三十年ノ間儒者佛者
和學者職原家哥人俳人天文者
其外諸先生ノ訂歩歴テ漸ク當年各成

万葉集 古事記

日本書紀 日本歳時記

文德實録 三代實録

拾芥抄 五家髓腦

延喜格式 源氏物語

伊勢物語 采花物語

枕草紙 徒然草

北一代集 藏玉集

莫傳集 新撰六帖

夫木集 定家三部各

順和名	筑波集
大和本草	本草細目
本草拾遺	花鏡
鄉茶本草	採取月令
月令廣義	輟耕錄
三才圖會	前後漢各
階各	唐各
梁各	後晉各
字彙	爾雅
博物筌	五經
四各	法花經
涅槃經	華嚴經
杜律	李白集
白氏文集	唐明詩集
文選	引各目錄終

月令博物筌 大意

一此書正月門松ヲ立ルヨリ年終迄
 年中ノ歲事故事ヲ集ム上禁中
 公事故實ヨリ下四民諸式法月
 異名草木・鳥・蟲・獸等迄不
 殘集メ来由故事ヲ述譯ヲ委レシ
 記レ異名・漢名迄不洩集ム月
 一冊トシテ正月ヨリ十二月迄十冊分ル
 草木種類花形其外何ニ依文ニ
 テ分リ雅キモノハ夫々圖ヲ出ス
 一條毎ニ哥・奇ノ詞・連哥・能僧・
 狂哥・詩・詩聯・故事ヲ夫々ニ加ヘ
 作例證據トス
 一 生花ノ正式・衣服ノ正式・養生法・食
 物善惡・料理献立・年中ノ吉凶・米
 一 豊凶ヲ知法・草木植様・菓物
 貯ヤウ・妙術・妙菜・風雨ノ考
 等何レモ月々日々ニ記ス
 一年中ノ公事祭・草木・生類其外何ニ
 不依是迄能借ノ季ニ用テ来物ノ印

付但正月季有物二月三月凡物ハ
 印ヲ附ル士月凡物ハ
 成能ニ冬成物ハ其餘下ニ註解ス
 四季折々遊山翫水等ノ手紙ヲ其
 節序ニ加ヘ尺牘ヲ旁ニ付テ上中下
 ノ各替ヲレテ漢文ヲ作ル便リト
 漢文淺学ノ人ト雖此各ヲ見レハ
 即時ニ文章作ラルヤウニ設タリ
 此各雅俗日用重法ノ各ト魚ノ菜ハ哥
 詠能楷ヲ作ル人ニ為ニ撰テ各ナリ故ニ
 七十二候ハ毎月六候ヲ出ス有来ル生類
 七十二候也草木七十二候有他各ニ無キ物
 ナリ此各ニ出ルヲレテ未ダシク註解ス其
 外是追他本ニキ季成物多ク出シ古
 哥ノ如ク作例トス
 詩詩體詩聯大牘ヲ出シ詩作ニ便致
 ニ哥人能人詩人博字ト雖失忘ニ備シ
 右此各大抵ヲ奉ケ示ス年中ノ事多
 ク品類ヲレハ一々例ヲ記ス暇アズ次ニ
 門部分ノ大意ヲ記ス
 大意終

門部分並目録之註

正月

始メの九の印此内ハ其月の
 干支・八卦の其月ハ當ル卦
 調子の其月ハ當ル律呂・陰氣陽
 氣の生ズル教ト記シ次ニ其註ト解
 節立 此九の印の内ハ其月の節・
 七十二候・草木七十二候・昼夜
 の長短・日の出入凡の方角ト記シ次
 右の註解ト委ニク各々

中雨

此九の内ハ節トシテ十六日中ニ七
 十二候日出其外曼出ト夏節同

日令

此部ハ其月且定リたる事ハ其行
 事・五節句音・諸祭・風雨の考
 養生の法其外日の定ル入用の事ト出ス

月令

此部ハ其月の定ムル事ト其
 月一ヶ月の事ト其つむ

時令

此部ハ時氣拘リたる事ト出
 譬ハ正月ウツル初春・餘寒
 等の事又三月ウツル暮春・三月

冬ふゆ時とき候うけ小この事こととの事

草木 此部こゝ其月そのつきの草木くさくさを集あつむ但たゞ妙たぎ茶ちやの物もの病びやう症しやう用もちひやうと記しす

生類 此部こゝ其月そのつきの鳥とり・虫むし・獸けもの諸しよの生類せいりゆとあつむ

必用 此部こゝ其日そのひの定さだまらざる其月そのつき一ひと月の養生やしやうの法ほふ・風雨ふううの考かう・米こめの豊とよ凶あやふ・妙術たぎじゆつ・天氣てんき占うら候け・料理りやうり献けん立たて其外そのほか入用いりようの諸しよの雜事ざつじとあるす日ひの定さだまる事ことの口くちの日令ひのしんの如ごとくあり

故事こゝの如此ごとかこの内うちに有ある白字はくじの如ごとくあり

此の如ごとくたの妙たぎ茶ちやなり

詩し哥か連れん能ねいの始はじめ小こ此この如ごとくたの如ごとくあり次つぎの如ごとくあり

異名いみな尺牘せきせんの始はじめ小こ此この如ごとくあり

正月部目錄

△印いんの能ねい借けいの季きをり物ものあり

○養生やしやうの法ほふ・雨風うふうの考かう・米こめの豊とよ凶あやふ・妙たぎ茶ちや其外そのほか人家にや重ちゆう室しつの事ことの如ごとくあり

發端はつたん 春はるの由よし來き 春はるの興きよう名な 正せい丁てい

正月しょうげつ 陰陽いんやう生せい 調子てうし 正せい丁てい

正月しょうげつ古今ここん違ちが 正せい丁てい △立たて春節しんせつ 正せい丁てい

△若水わかしづ 正せい丁てい △雨水中うみづちゆう 正せい丁てい

正せい日じつ令れい 此部こゝ其日そのひの定さだまらざる事ことの如ごとくあり

△元日げんじつ 正せい丁てい △元日げんじつ異名いみな 正せい丁てい

△星せいと唱なふ 正せい丁てい △屠と換か白はく散さん 正せい丁てい

△朝あさ拜はい 正せい丁てい △院いん拜はい礼らい 正せい丁てい

△元日げんじつ節會せつかい 正せい丁てい △諸しよ司し奏そう 正せい丁てい

△七しち曜やう御曆ごりき 正せい丁てい △水みづ様さま 正せい丁てい

△腹はら赤あか 正せい丁てい △國くに柶し奏そう 正せい丁てい

日朝

正月目録

△齒固	△門松	△大飴	△門神棚	△雜煮	△太箸	△加賀御草	△押鮎	△小殿原	△螺着	△葩煎賣	△大福	△庭竈	△幸木	△毘沙門徳経
正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正
△鏡餅	△注連飴	△惠方	△蓬菜	△料物	△開豆	△練鰯	△依海岸	△海鱸	△相鯛	△年男	△福藁	△福鍋	△鬼打木	△若戎
正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正

△星佛	△初鶏	△初夢	△三物俳諧	△若餅	△羽子板	△毬打	△宝引	△書初	△毬浴	△三ヶ日	△春永	△湯殿始	△ひめ始
正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正
△懸想文賣	△稻積	△三物連歌	△祇園削掛	△破魔弓	△胡木仕子	△玉打	△年玉	△去年今年	△御降	△松の内	△藏開	△弓始	△馬乗初
正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正	正

初春 正月日の定まらざる歳旦と

△縣召除目 手

△花朝節 手

△住吉御弓 手

△踏歌 手

△十四年越 手

△土龍打 手

△御新 手

△平岡御粥 手

△御穂祭 手

△女踏歌 手

△明神々詠 手

△禁裏伶人の舞御覽 手

△賭弓 手

△吉田社清板 手

△九日だんど 手

△事始 手

△解齋御粥 手

△削花 手

△頭柿綿 手

△繩引 手

△三打 手

△赤小豆粥祝 手

△上元 手

△獅子頭神事 手

△走百病 手

△十六日櫻 手

△幡厄神祭 手

△骨正月 手

△嚴嶋祭 手

△内宴 手

△初天神 手

△正月令 手

△外記政始 手

△偶便師 手

△初芝居 手

△歳旦開 手

△正月男女衣服式 手

△時令 手

△初春 手

△春雪 手

△山笑 手

△草木 手

△松の花 手

△初不動 手

△御忌 手

△店卸 手

△夷廻 手

△三節 手

△正五九月の説 手

△餘寒 手

△残雪 手

△春氷 手

△日待月待 手

△梅 手

△此部ふり正月一ヶ月のふり

△此部ふり正月一ヶ月のふり

△此部ふり正月一ヶ月のふり

△土筆	△福壽草	△下痢	△若草	△若根蓮	△水菜	△鶯菜	△田	△生類	△猫の毒	△朝鷹	△鳥さうろ	△飯鮎	△必用
△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解
△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解
△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解	△木芽解

月令博物笥發端

九と内ふたすの春の氣の旺る所
 陽氣下と降る
 地の陰氣上と
 騰る天地和合
 交泰する故草
 木芽はら萌出
 發生とて春
 第二葉春爲主



春由來

漢書律曆志云春者
 蠢也蠢とて物の動る生
 通説云春之言發也草木芽發
 也云月令天地和同草木萌
 動とるも同心之万葉集第九

哥山岨の久世の
 是と以て考ふは芽のちると云説々
 万葉集とて據とらんは

是と以て考ふは芽のちると云説々
 万葉集とて據とらんは

惣じて本朝の古言古訓と云い万
葉日本紀古事紀ふよりてころる
或説ふ春とつるの晴とつる空麗
小晴るとつる心ありとつる

春異名
太皞 青帝 青皇
東君 勾芒 蒼天

青陽 陽和 花蓋 迎陽 韶光
○太皞と云い唐土伏羲帝のこと

木徳の君と云い唐土昔より世々
小日本の年徳神と祭るがごとく春
乃初小祀と云い禮記月令云太皞

伏羲木徳君云○青帝は春神
ありと楚辭不見と云い○青皇も

春の神と云い青皇思澤無窮限
まど詩ふ作まり○東君郊祀志

曰晉巫祀東君顔師古曰東君は
日の神なり○勾芒は少皞氏の

子重と云い木神也春の神
守太皞と合せ祭るなり

○蒼天は氣の初て發して

色蒼々たるを以て稱と云い青
陽は天地の盛徳春の木は有る木

色青々たるを以て青陽と云い陽和
と云い白居易が詩先遣陽和報

消息と有るなり○花蓋は
夏候湛が賦春可樂と綴雜花

以為蓋と云い云い○迎陽は
立春と云いあり○韶光は韶の

美也云春の景色のうらやまき
と云い猶漢書律曆志小媚景

或は韶景と云いなり○韶光は韶の
と云い○瓊通は續漢書小見と云い

○解凍は礼記の月令小出と云い
と云い○新陽は詩學大成小出と云い

○微和は陶淵明が詩小出と云い
○華始は礼樂志小出と云い○歲始

は公羊傳小見と云い○春生は律
曆志小出と云い○木徳は震官初

動木徳唯仁
○方は

春為主
東也

と有階青帝
歌小見也

云の易の説卦傳曰帝出乎震
 齊乎巽又曰萬物出乎震震東
 方也又曰兌正秋也萬物所説
 也これとて震之正春なる
 明者陽の仁者の徳小
 して春陽の氣仁の道と守
 蒼天といふ春の東方の正色蒼々
 然として暗故蒼天といふ〇卦の
 震はて震の木の象〇色は木徳
 青緑と主とる故青陽といふ
 礼記春と東郊ふひて青馬七
 匹を用ふといふ〇精は蒼龍とい神の
 体精は用也春の用は能發生と龍乾
 の用はて陽の靈能動發と速と盛と
 象〇少陽勞陽少陰勞陰の四象の
 初て春の氣は是少陽明厥陰と加へて
 六氣と云〇味は苦と酸と主とる〇肝は木屬
 春の肝尤旺とる之死氣肝小入る
 △右の外春三月の季乃りの三月
 の部乃とをよつてす

正月乃部

〇十月地中に陽生十二月三陽生正月



〇十月地中に陽生十二月三陽生正月
 〇十一月小
 子の月とす十二
 月は正月寅

異名

正月 端月 孟春 發春
 獻春 規春 開春 上春

初春 發歲 三陽 初暝 蒼龍月
 新陽 謹月 太簇 夏正 睦月

〇正月と一月といはせて
 正月といふ正一とせ

〇正月と一月といはせて
 正月といふ正一とせ

〇正月と一月といはせて
 正月といふ正一とせ

〇正月と一月といはせて
 正月といふ正一とせ

氣ふて万物とくみ生じり心あり
○阪月とくハ亦雅言正月の夏と

ハ阪ハ寅のころあり○夏正と云
唐正夏の代り寅の月と正月とする

ハ人名にけりあり○睦月といふを
清輔奥儀抄に如く貴き賤き

むつまぐゆきまらなりむつひ月
といふを畧してさるる○暮新月と云

年九て新き月とあり故名づく
○太郎月といふ俗人の子に

いふと太郎といふはさぶ生きたる人
次郎を名づく故正月の初月故名づく

○初去月 藏王
履ふのころ去月の朝日うけ

のどけさ色やさふるやん
○初空月 後鳥羽院御製

さるるをさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる

○端月 御集
去の末くいくよとありぬきむの
いざさるるさるるさるる

正月古今違 一年十二月の干支を
定む其月の中節

十六の星の斗柄建取の子支と以て
定む斗柄の建取の子支と以て

正月中節の星の斗柄寅建故
正月と寅の月とささむるなり

○唐正夏の商周右三代正月別々
夏の國禹王の世は寅の月と以て正月

今の正夏の湯王の世は丑の月と以て正月
と以て殷の周の文王の世は子の月

と以て殷の正月と定むありて
一理ありさるる天を子と開くと以て

周の子の月と正月と定め地を未開く
少商の丑の月と正月と定む人の寅

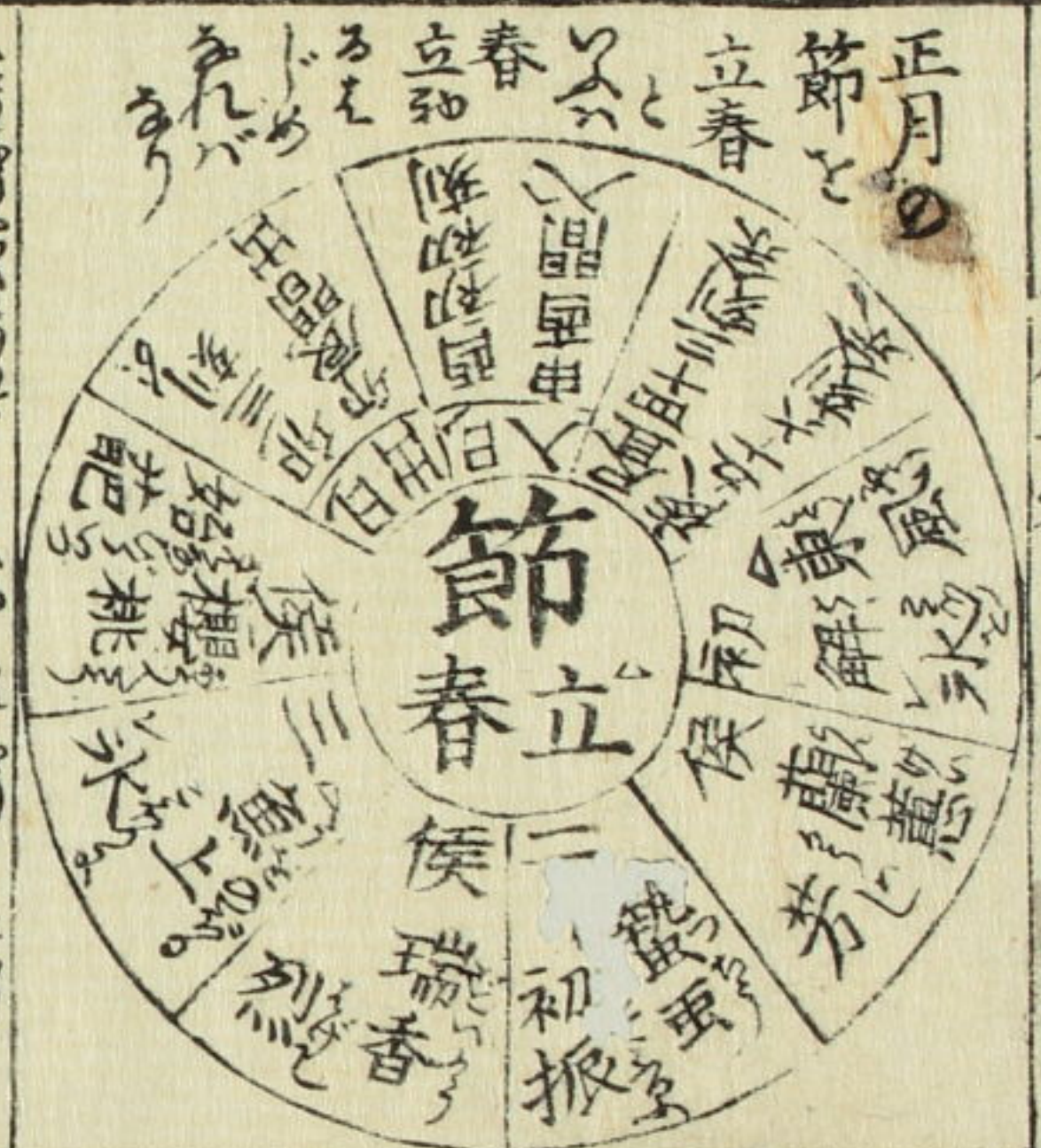
定む少夏の寅の月と正月とささむ
天地人相と初より其後秦といふ世は

て古典と悉く改めて亥の月と以て
正月と定む今漢の代も是なり

しが武帝の時始て古代の通り改め
寅の月と正月と定めより今亦變せず

本朝の神代より寅の月と正月と定めて變じり夏は此論春秋正月考とくする書小委一ありりた事あり見さべし

節。立春の七十二候。草木七十二候。昼夜長短の日出入等左に記す



△立春候解氷といふ冬に寒風とて氷も春の東風と受て解初。蘭蕙と風蘭也。蟄虫の冬虫の地中より出る春の氣にてとろく出る。瑞香ハ遊といふ。櫻桃ハ庭櫻あり

立春天氣

立春は北方か紫緑白の雲

あまは三素飛雲と云て三元君天上に詣ると日なりけをて再拜とて必ず福ありと書い見さる。三日晴天をまを豊年。前後三日の間風雨少あまは其後四五六日の間天地の氣そのひて万物はあつひさえ又人の身も安全めで病少とさる。若又四五日と前より雨を其後四五日風雨少く四五日後は風雨あは。立春占候

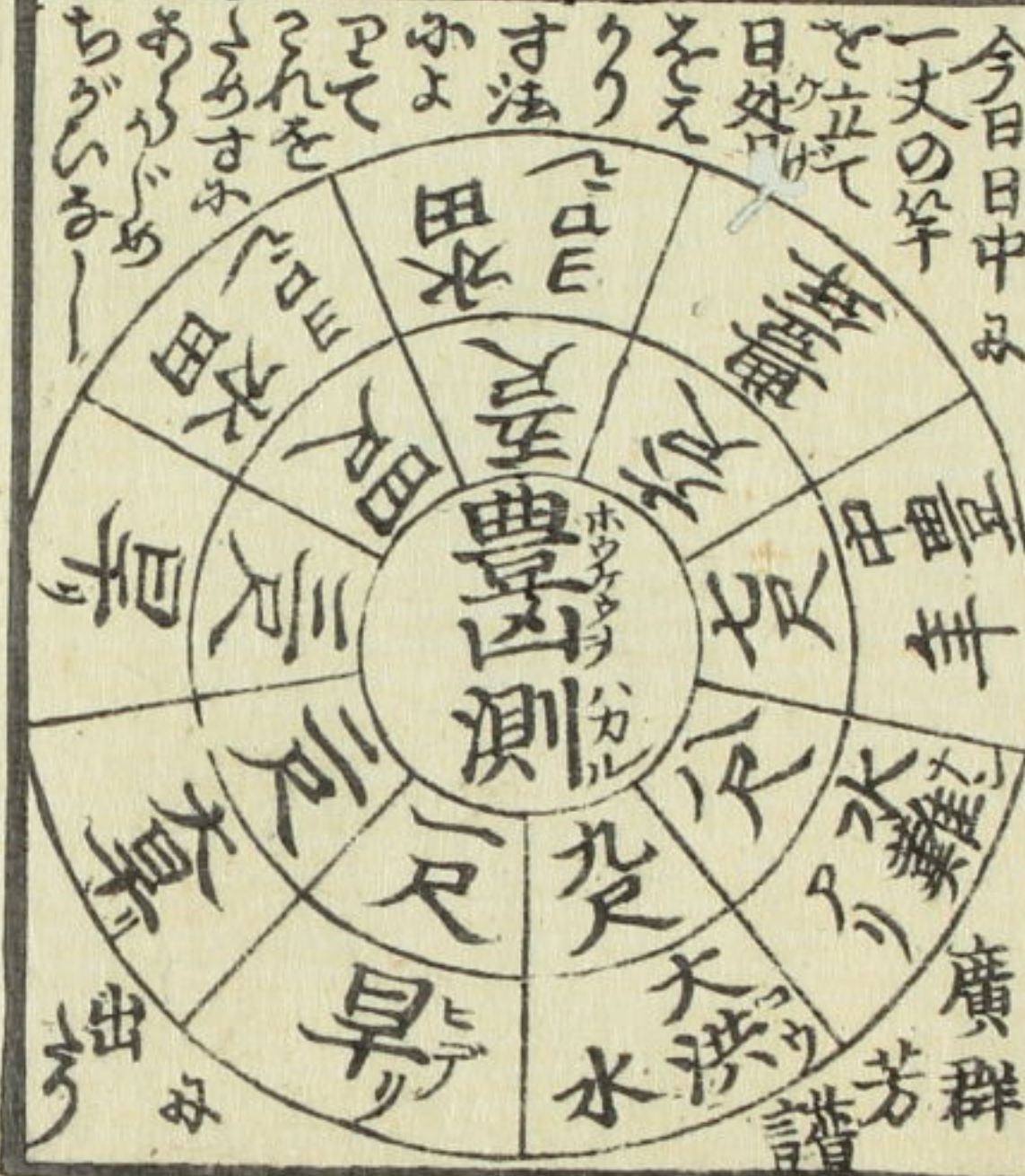
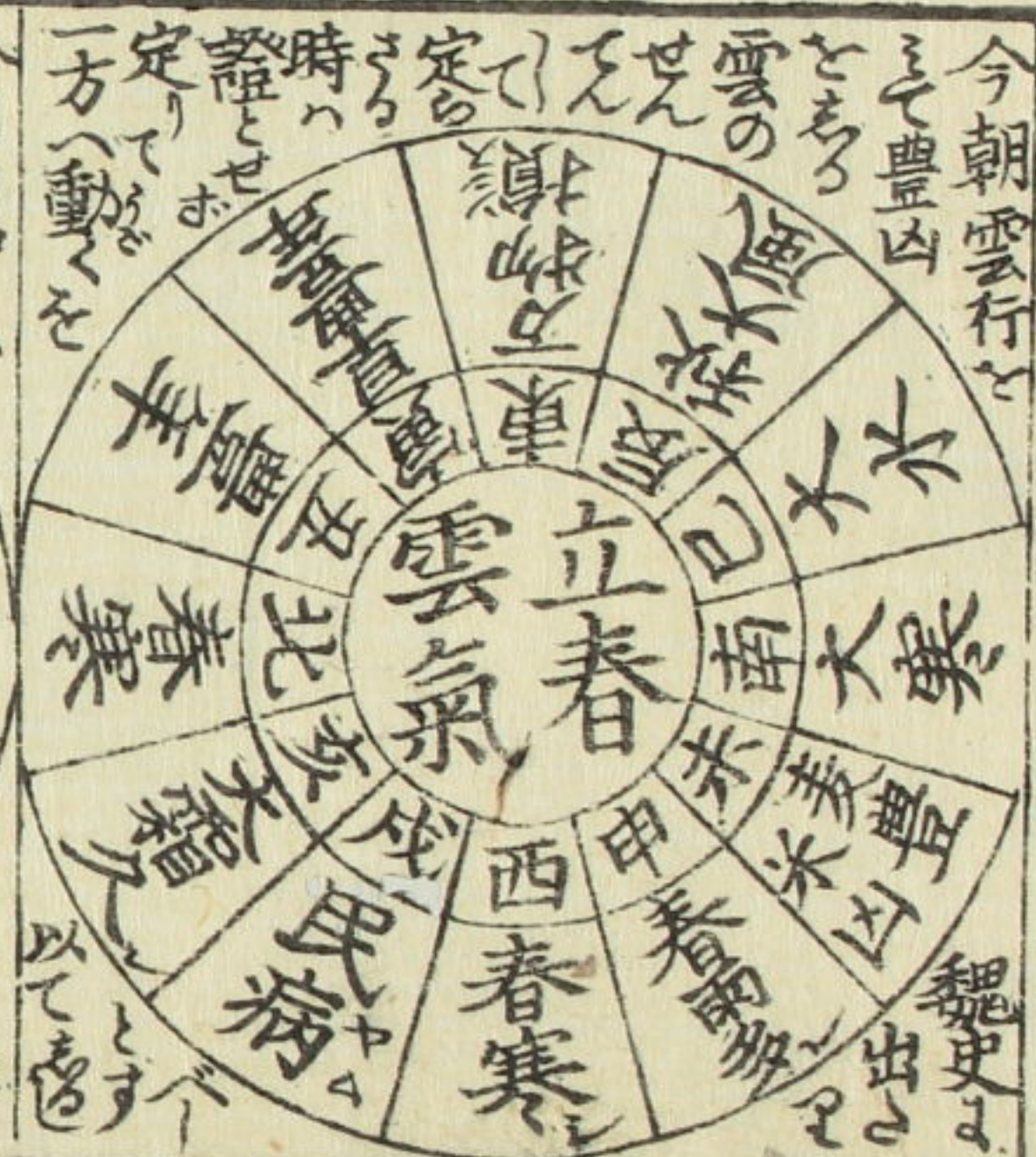
立春占候

此日四方は黄なる雲氣あまを五穀よく實のる春の雲氣あまは虫五穀とやがる。日いよご出さる時東は黒雲あまを春雨多し西はあまは秋雨多し北はあまは冬雨多し。東方は

青雲あれ雨多し赤雲あれ
夏はどろけ米乃あてい貴し

立春雲氣

今朝雲行
今朝云ハ日出時の
事次の九と考バ



立春

正月のせりぎりす 元旦のま
あつさ けあつ時の俳諧は正月の季用

哥 千五百番哥合立春 通具

今朝とらふ雲の志の強をい
みどりけふふまはれ初そら

新古今

攝政大臣

みどりけふふまはれ初そら
あつさ けあつ時の俳諧は正月の季用

雲葉 立春

人丸

美こあといふつげに相坂乃
ゆへはけもれ夢にこそま

千首

立春風

為尹

まいつまきつる波の志こそすけ
それともびまそ川をぞそく

金槐

海辺立春

鎌倉長臣

賑ふの浦は風くはむむら
八十物ふけて春やうららん

草庵

立春氷

頭阿

たえくふあまがれて山川乃
岩城と波もまよらにけり

万代

忠見

春庭よりとく月夜ひく人ほ
とくれあるどとあやさるらん

夫木 曉立春

家隆

あつ玉れふとせの春乃初めと
ハノ冬のもももさせいふかり

龜山殿百首

立春水

六条有忠

年どいふかかひてふさうさ
老せぬ若さたりさるらん

夫木

西行

とさ山ま誠あひてあせたり
こありさたかくうさひさのさ

龜山殿百首

立春天

後宇多院

えうの天れ春之山かひさるる
まうろくふ乃をふぞあうける

同

立春日

同上

足引の山に燈くれてまのく
日新いけさよかどぬさるらん

夫木

山立春

知家

いふや山天の雲より今うら
あふふま井かまのさひたり

立春霞

素然

ほのほりねもみどりのひさ
霞をそくふま乃さるらん

詞

立春の得。本がま。ま初の春。ま
うらふ。物日新。氷りあがきて。老

せぬま。霞初。打あひさ。あふ山
春の雲。千代さるる。まのさるる

花のまの。まをひつる。まの
春まらえさる。まのさる。まのさる

まをさる。あつなまのま。まを
いと秋のま。四方のま。あつらん

連 春さる。あつなまのま。まを
霞のま。まをさる。まのま。まのま

まのま。まをさる。まのま。まのま
まのま。まをさる。まのま。まのま

排 年のま。まをさる。まのま。まのま
まのま。まをさる。まのま。まのま

養 春さる。まをさる。まのま。まのま
まのま。まをさる。まのま。まのま

狂 ぬれぬかしの物日づけ 牧雨
まのま。まをさる。まのま。まのま

まのま。まをさる。まのま。まのま
まのま。まをさる。まのま。まのま

立春故事

鞭春牛

立春節 前一日

開封府ヨリ春牛ヲ進テ禁中ニ
入テ春ヲムチナツク春ハスム義ニ取

ナリ百姓皆會春 **泥牛** 年

牛ヲ賣ルトイヘリ

ヨリ土ニテ牛ヲ依リオキ

寒氣ヲ送ル月令ニ見ル

燕 歳時記ニ立春ノ日悉ク

綵ヲキリテ燕ヲ依リテ

宜春ノ文 **賜綵勝** 唐ノ朝

字ヲ貼ス

二立春ノ日侍臣ヲ望春官ニ

召サレ春ヲ迎ル人毎ニ綵勝

花トテ依リ分チヲ賜フ由

文昌雜錄ニ見ヘタリ **農**

祥正 農祥ハ房星ノ精ナリ

正シトハ辰ニ南カ

ニアラハル、イナリ **葭灰ヲ飛**

國語ニ見ヘタリ

立春ノ日芦ノ葉ノ灰ヲ律管ノ

端ニモリミテ、オケバ春氣至ル

時其灰オノツカラ飛ヨシ委

シク事文類聚ニ見エタリ

歌青陽

後漢書ノ祭祀志ニ

ニ至リテ春ヲ迎フ車騎服節ニ

ナ青シ青陽ヲ歌ヒ雲霧ヲ

舞フトイヘリ

歌曲ノ名ナリ

詩 立春五字對句 同上

詔光開令序 惠風初應律

唐ノ則天春時令ヲ云

淑氣動豐年 和氣正調梅

春ノ溫和ノ時令

詩 立春七字對句 詩礎

三陽候節金為勝 氣象新

立春ヲニテ

百福迎祥玉 作杯應陽春

年酒ヲクム

若水 新水去年の生氣の方井

を鎮トテ蓋をシて人又汲

せど春ノ日主水司内裏ニ

奉送ハ朝餉ニされをきあし

正月若水元日立春詩正ノ八

をり新玉の春より日奉まば若
水といふ去年より井を封じ置
包井開くともいふ世俗母若水を
元日とする季より世三丁めあり

韓仲行 夏母の志をえてくふなる若水
ふせの影やふらふらふらん
義烈なるをよこし河をまよふ
ひとあやふはの初めたるん俊頼

元日立春

万葉

久々のとれか山

は夕夜ふれびくまふらじりし

建長哥合 立春

頭朝

あつ玉のこもれ日をゆくゆく
と山初めのまはさぬたり

連 春までこふひらの始めぬ玄仙
俳句の下のまはさぬけさる春宗因

狂 古今夷曲

春ふれといふざりより大ぶくの
あはれも度までけさるあふらん

哥の詞八立春めて見合用也へ

詩音著五字對句

同上

春城映朝日

綵仗迎春日

緑柳揺春風

細煙接瑞香

詩元日立春七字對句

詩礎

瑞色含春當正殿

轉綠蘋

香煙捧日在高樓

瑞色新

瑞氣朝浮五雲閣

紫氣中

朝光夜吐萬年枝

曲迎春

春風掩映千門柳

四海中

曉色融和萬井煙

象昭圓

元日立春

節宣

散臘迎新淑氣回

一年程十
夕暮レテ

正月 年内立春詩哥 正九ノ十

又春ニ立 乾坤此日泰初

正月ハ天地ノ氣モ三陽地ニアラハ

庭前積雪徐々化 天地ノ陽

雪モフロクト 天上和風習々来

年内立春 元日よりまへは春乃

和哥の式ニ准して此處より出と

哥 續古今 入道前大政大臣

春の初めは春の初めと云ふは

年ノ初めは春の初めと云ふは

年ノ初めは春の初めと云ふは

年ノ初めは春の初めと云ふは

年ノ初めは春の初めと云ふは

年ノ初めは春の初めと云ふは

詩 立春之詞

仙家日月本長生 仙人ノスム

トヨリ長生ユハ日月モ 仙人ノスム

トコニナヘニノグルナリ 送臘

迎春亦寂然 冬ハクレ春ニ

コトモナクモノレツカニレテ各別ニ

アラタニリタルコトモナキトナリ

翠管銀鈎傳故事 仙宮

器ヲモテアソブコトハ常ノコトナリ

故事ヲアマタ云ヒツタフルナリ

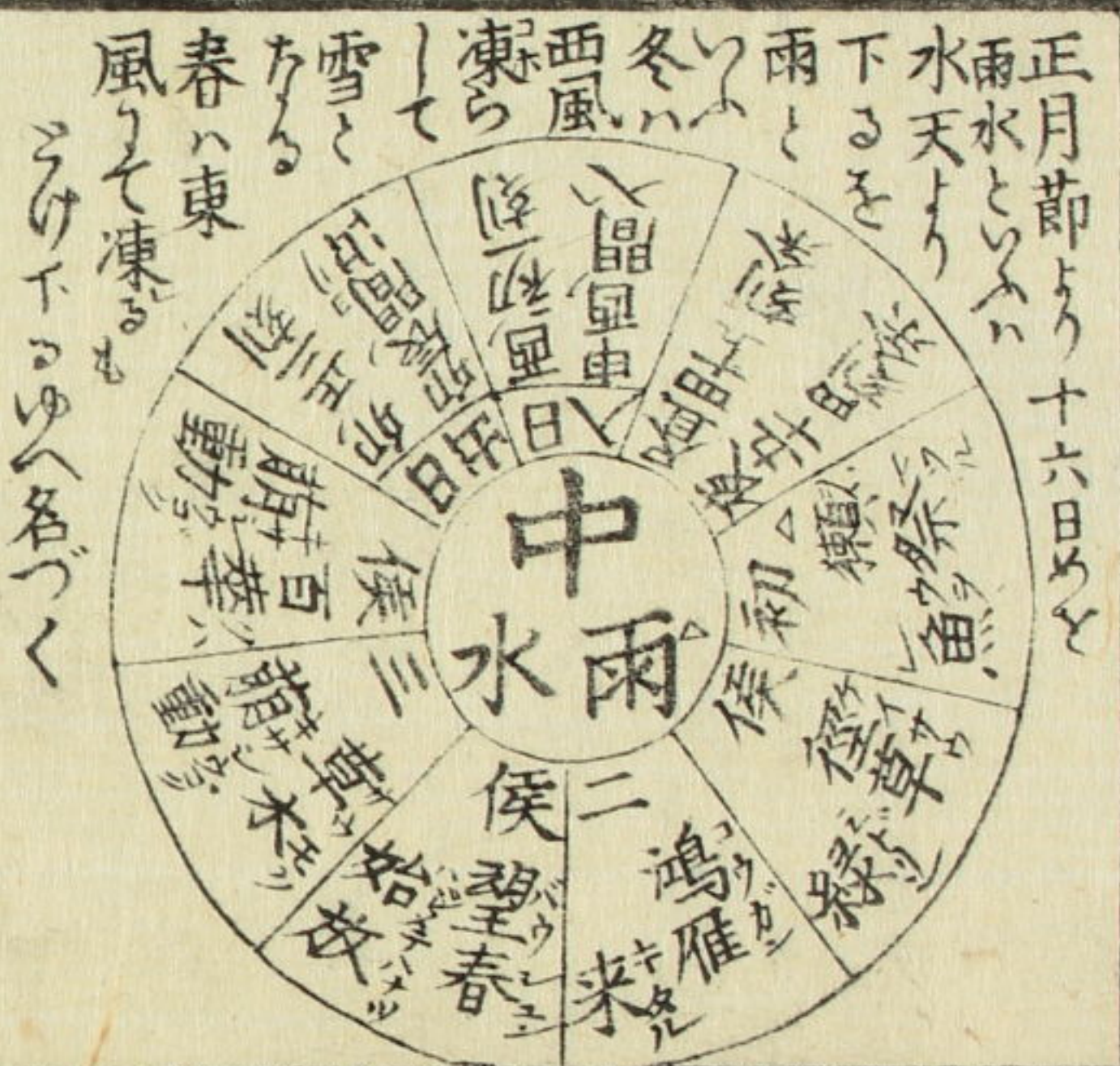
金花綵勝作新年 金銀ニテ花ヲ

疫病を除く方 立春ののらみ

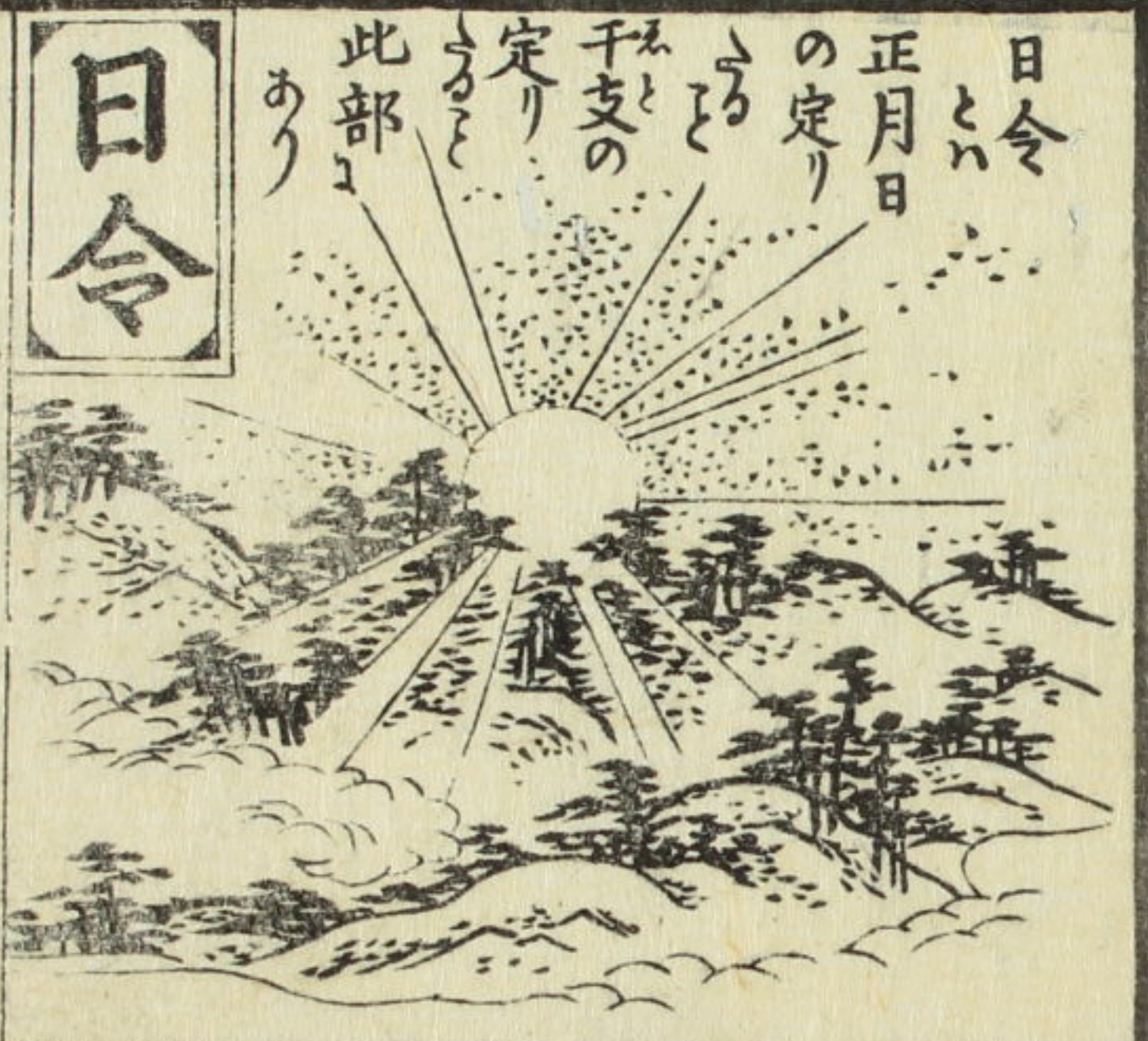
子の日蔓草を搗むはう汁を

小服をば疫病を除く

中 七十二候。草木七十二候。日出入 昼夜長短委しく尤ふ記を



正月節より十六日迄
雨水と云ふ
水天より
下るる
雨と
冬ハ
西風
寒
雪
春ハ東
風と凍
この下るゆへ名づく
獺ハ常小魚とて喰ひ命とほそぐ
ゆハ其息を報じると春のち
多小魚をとりて祭ふるあり
○徑草ハ道辺の草也青々と成 鴻雁
のる事ハ陽氣ふるに次第小南より北へ
歸之。望春始放と云支 初鰯と有 草木
百花陽氣惠れと梢芽立と萌動と
○柳のさるるをよませ計製 蕉翁



日令
正月日
の定り
干支の
定り
此部
あり

朔元日 日 鷄日 今日と鷄日
日註 證哥 鷄日 今日と鷄日
方朔ハ占書ハ出て八日迄悉く
名あり其日天氣和順なれば其
名づく所の日のさくるとある
ども其理通ハ此事貝原先
生日本歳時記ハ未だ未だあり
見るべし面白き事なり

天氣 元朝々々大雪 五年
旱年とあるべし 晴天

されば年ゆきりて人民安し
 風雨されば米價貴し○微風
 細雨あれば梅雨の内日和長し
 秋洪水あり○三ヶ日の間風雨
 多くありて日色と見えれば二年
 の大美をばりさとしふ○四方晴天
 自然と和氣ありて春のけしき
 うららかなるを豊年とす雨みも
 あれば黒くありて陰々たる
 し又美あり○東風吹は夏に至
 りて米價賤し○南風吹は春
 より夏ふりて米價ややく
 又旱をばりさとしふ西風ふけば春
 より夏の米價貴し豆は能實
 のり北風ふけば水の災あり○
 今朝東北より風吹は五穀熟し
 て年豊あり西南の風吹は大水あり
 て耕作のさびげとある東南
 の風は南風吹は雷鳴て空
 かりす○今朝北より大風吹を

春の雨人民病ありはと大風を
 ども北風吹は春の中多く病あり
 へ○終日北風吹は其年とや
 と病のさびげとある事あり○南
 方より風吹は旱事のまありあり
 ○今日大風吹は蚕破きて糸の
 價貴し又五穀のさびげ○天晴
 是暖ありて風ふれば五穀よく
 熟し七米價賤し人民安全
 のり病もさびげとあり○今日
 雪ふれば豊年又 **占候** 元日
 旱とつらさとしふ **占候** 小あ
 まば米價賤し或は人民疫
 病を煩ふとありふれば米價
 貴し或は人民病あり雨ふあ
 れば四十日の旱あり丁にあ
 れば糸綿の價貴し **占候**
 あり **占候** 麦粟魚塩
 の價貴さたり或は旱とある事
 四十五日あり **占候** あり **占候** 米價貴

く或ひの蚤あけ或ひの雨風多
 く庚かあされが金銀の價貴し
 或ひの和実のり又ひ人小病あり
 辛かあされが麻麥の價貴し或
 ひの和大は収ふ土ふあされが米麥
 の價貴し癸ふあされが和ふ災
 あり或ひの人民疫病
 を煩ひ又ひ雨多し
 十二月

晴雨考

元旦水茶碗一杯
 杯汲之其目をくけ

をく二日ふも又水茶碗一杯
 汲之目とくけあるるるるるる
 水元旦ふくまふ水より
 重き時其月雨あはく輕
 きと死の晴はくを二日死を
 二月三日死の三月四月死を
 四月と次第くく小より十
 二日かあて見まは十二月
 までの晴まくと雨
 ととあるるるるる

元朝八方の風
 を以てその
 年の美惡
 をうらるる
 漢書
 出たり
 風はよるれが
 考りまはは



元日賀

今日を賀する始り
 本朝ふて神武天皇

の御宇より始る唐土ふて漢
 此世よりくくめてあまをたは
 日本より四百年より後のあま

元日異名

証證哥與
 委くまると
 三朝

三始三微三元四始元旦
 正旦青旦雞旦雞日正朝

淑節詔節嘉時初正初陽
 更始履端天臘上日聖日

改旦歳旦元三羊頭初年
 新善年明善年羊立あ

玉の年羊の始
 三の朝日れ始め四方拜

元旦の寅の時皇の屬星と

とぬへ天地四方の山陵と拜し

しるの年災と拂ひ室祿を

祈り申さる事小侍ふるや

清涼殿の東階の前ふて屏風

とて白木の机よ香花と立

行いふ事 **星ととるふ** 年中行

合ふいつく當年の星本命星

をまがし七返げとるふ事

とていつく今在家の世俗星

佛とて祭るも其まゝろを人

るるべしとらり **供御薬** 天

光りのとひき **子**

畫の御座み出御さりて御衣

を御生氣のくみの色ふりく

させふいて茶子とていよと嫁

せざる小女よ先香しとるふ

屠蘇蘇ハ小児よりのみ 其後銀器

初るりの計り女より初る

白散をすく免奉る三献小度

瘡散をすく免奉る三献小度

茶子 **年中行事** 〇毎ふくふりそむる

茶子 **年中行事** 〇毎ふくふりそむる

屠蘇白散 嗟哉天皇の弘

これをを行る一人あまを吞い

を一家病かゝ一家これを吞ぬ

まば一郷病かゝとらり 歳時

記ふらひひう道士毎年除夜

母間里ふ来て茶一貼と贈て

紅の袋よ入きて井中いひこめ

置扱元日其袋を水中よりとり

あげ酒ふ和してこれを吞べ瘟疫

を病どとらり屠蘇はあるとま

蘇はうとらるとよむ邪氣をや

あうほろり人の神とよとら

ととらふの理なり 醫家多く

上み点を加へて屠蘇と書く
ふせ尸のまづのひとむ字を
ゆへ又思避て戸ふ書くとつう

此某方より十二月の部ふあり

非松の子いそ末を其ま會月

庭初ふまぬ庭とるをの酒高

詩屠蘇酒 紫府仙人授寶方

仙人ノ住ム所ナリ宝 新正先許少

方ハ屠蘇ヲ指ス 屠蘇酒ハ年始ニ先

年嘗 少年ヨリ吞初ルナリハ神奉

命調金鼎 八神ハ八將神一年ノ命運

ヲ調スル 一氣回春滿絳囊

器ナリ 絳囊ハ屠蘇ヲ 靈液夜流干

入ル紅ノフコナリ 尺井 靈液ハ屠蘇ノ自然汁ナリ大

尺井 晦ノ夜中井ヘツリサゲテクニ

春風曉入九霞觴 九霞觴ハ

將鳳曆從頭數日々持杯訪醉

卿鳳曆ハ春初之日々杯ヲ持テ明 瞿祐

一屠蘇酒ヲ酌テ酔テタシム

朝拜 朝賀奏賀 元日小群

拜一申さる事々々小朝拜

ハ略儀のて殿上をうとら

公事 神武帝元年正月朔日柏

根源 原の宮ふ都と立位即ち道

臣の命等天瑞と奏せらるよ

と起さる少々日本記みあり

朝賀 年中行事云は上は賀ありと

よふしとれ姑の美代乃あり

示朝拜日とるぎい私さしとや

どりを枕多糸はまこそとるふ

非松殿とふふおる 院拜礼 同

初賀の那 喜清 仙洞にも行ひふ拾芥扱ふ云院

糸の人々院の御所とて拜礼ある

事とる 元日節會 諸司の奏

會七曜御曆

氷様腹赤国栖奏 あまのつるの事

と元日奏聞す あまのつるの奏聞

とだてのし紫震殿小渡御さうて

百官小酒となす あまのつるの奏聞

あ代え あまのつるの奏聞

同和春の あまのつるの奏聞

の あまのつるの奏聞

諸司は奏 あまのつるの奏聞

奏 あまのつるの奏聞

七曜御曆 あまのつるの奏聞

七曜の事と書 あまのつるの奏聞

氷の様 あまのつるの奏聞

去筆の氷 あまのつるの奏聞

節會の あまのつるの奏聞

其時氷の あまのつるの奏聞

石瓦の あまのつるの奏聞

式 あまのつるの奏聞

と年 あまのつるの奏聞

事 あまのつるの奏聞

事 あまのつるの奏聞

事 あまのつるの奏聞

事 あまのつるの奏聞

氷様腹赤国栖奏 あまのつるの事

と元日奏聞す あまのつるの奏聞

とだてのし紫震殿小渡御さうて

百官小酒となす あまのつるの奏聞

あ代え あまのつるの奏聞

同和春の あまのつるの奏聞

の あまのつるの奏聞

諸司は奏 あまのつるの奏聞

奏 あまのつるの奏聞

七曜御曆 あまのつるの奏聞

七曜の事と書 あまのつるの奏聞

氷の様 あまのつるの奏聞

去筆の氷 あまのつるの奏聞

節會の あまのつるの奏聞

其時氷の あまのつるの奏聞

石瓦の あまのつるの奏聞

式 あまのつるの奏聞

と年 あまのつるの奏聞

事 あまのつるの奏聞

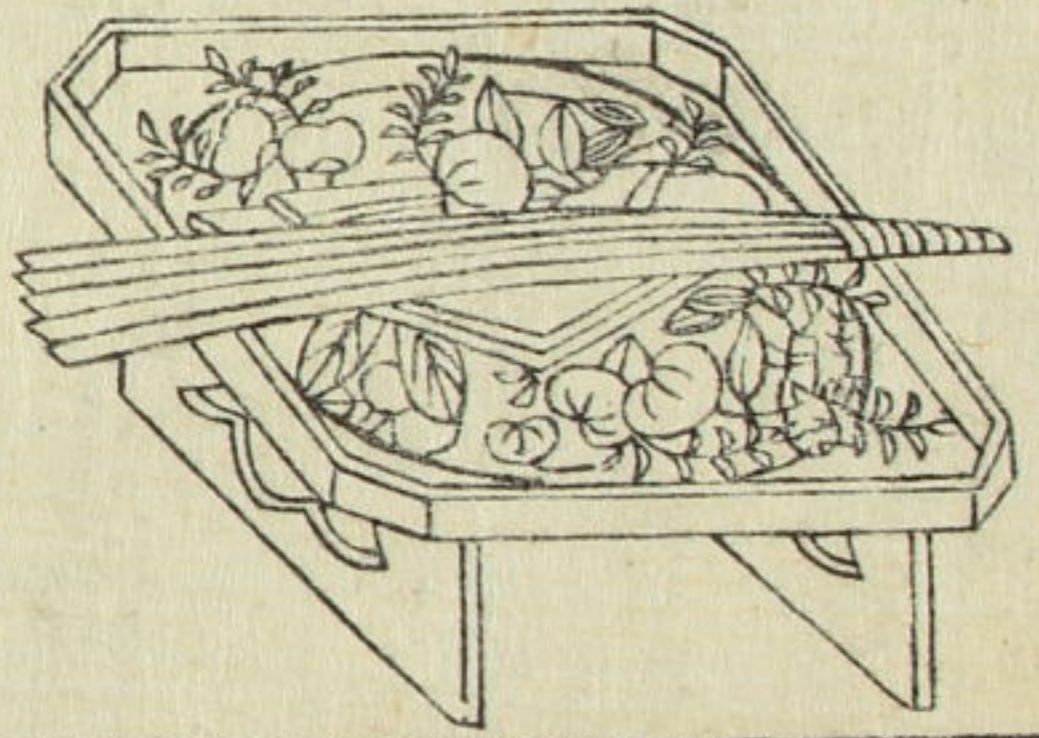
事 あまのつるの奏聞

事 あまのつるの奏聞

事 あまのつるの奏聞

齒固

餅と鏡とて
向ふこい人の齒
と以て命しする
ゆ齒の字を
よつひともよむ
よそひをかこ
むるよきなり



高根六本に折敷をとく一の基
小大根搗とりほろり此餅は近江
の火さうの餅を専ら用るるり
あれよと哥小鏡山と寄てよむ
かり在家の鏡餅ふとどゆぐり
葉とをさき侍る清少納言が枕
草紙はゆぐり葉の事とよとて
まことよひのづかえがめのかほ
てはえいたるまゝ一名を親子草
とよより藏玉集おわり(あま)
あふふやかど炭のふとそたまは
かひてぞりゆり若うふとせい(かみ)

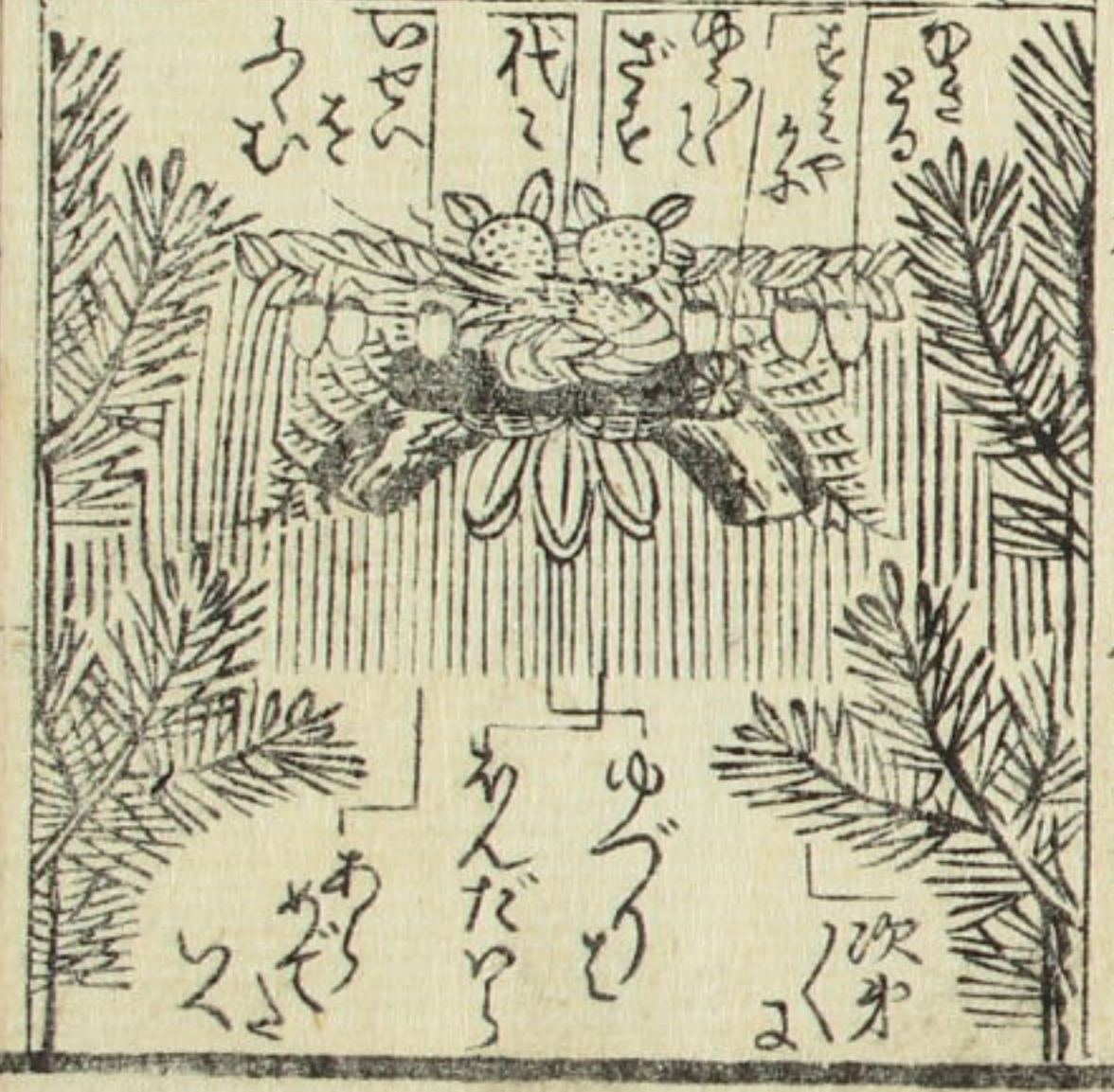
うまはたは言とへ夫木子代まをも新を
とるふとやん
あひておとを後後のりのふとや

詞 けいひのせえかえ餅 齒乃木
ゆり葉うら白大根根ふとを
おやこ草よつひのこむるやほくと

狂 子て花のかえこる餅は
あひくるとやふりといふん保友
鏡餅 神小供の餅と鏡の如く丸
くまを故名△りらひとせ云

月松 △立松△のう松△かざり竹
△松のう△門の竹△門のう

門松之圖



ゆぐり
あんだや
あま

松一千歳と契り竹一万代と契り
 のるれが年始の祝事用ゆは
 一条禅閣の御説より又松十返
 まで百年に一度花咲ても春也
 千年はより有とて年の始不用
 ①新六帖に今始とて春の始
 たるては後をさすやうなり
 詞花の初。民の初。民の戸。注
 連。百歳の座をあらた。年の
 始。年の初。ひまひ。ひまひ。ひまひ
 ②二足うすれは松や竹の松と松
 門松と竹とあるまの奏也。や
 ③狂餅つぎは松と竹と松と松と
 なる家の心正月の来川 一休和尙
 ④蒙盒もやうこくわ 蒙盒もやうこくわ 蒙盒もやうこくわ
 物と梅へ門松と竹と松と松と
 ⑤饅炭もやうたん 土中不埋りても久し
 本草ふくまを戸内ふくまを
 ⑥邪悪と避るとあれ用るるへ
 ⑦非 元日とみより十の心は
 其角

注連饅 △饅縄△かざりワ
 ちうちうちうちうちうち
 土佐日記
 注連と云ふはくハ不浄と云ふ心
 なり○神社は常ふ志めるとい
 けふ志めと云ふハ季ふと云ふハ
 ざる心と用いしハ正月の季なり

大饅 △松竹炭。繩其外
 正月かざり物をいふる
 ⑧日本の雛形もれや志をさす千河
 ⑨饅と云ふは春の門田松系ハ則重



此方角にて
 年々の恵方
 をあらへ
 己の年の
 ひの年の
 亥子の年
 わさなり
 余ハ是にて
 なぞへあへ
 婆利賽女の神と元方いひて
 の足りら雑煮など供へする
 △え方黍 △え方棚 △え方徳
 ⑩非 徳へ四方の辰や引出良徳

狂 恵方くく神の早く若節月
とくとく神のけしんみ依 一枝

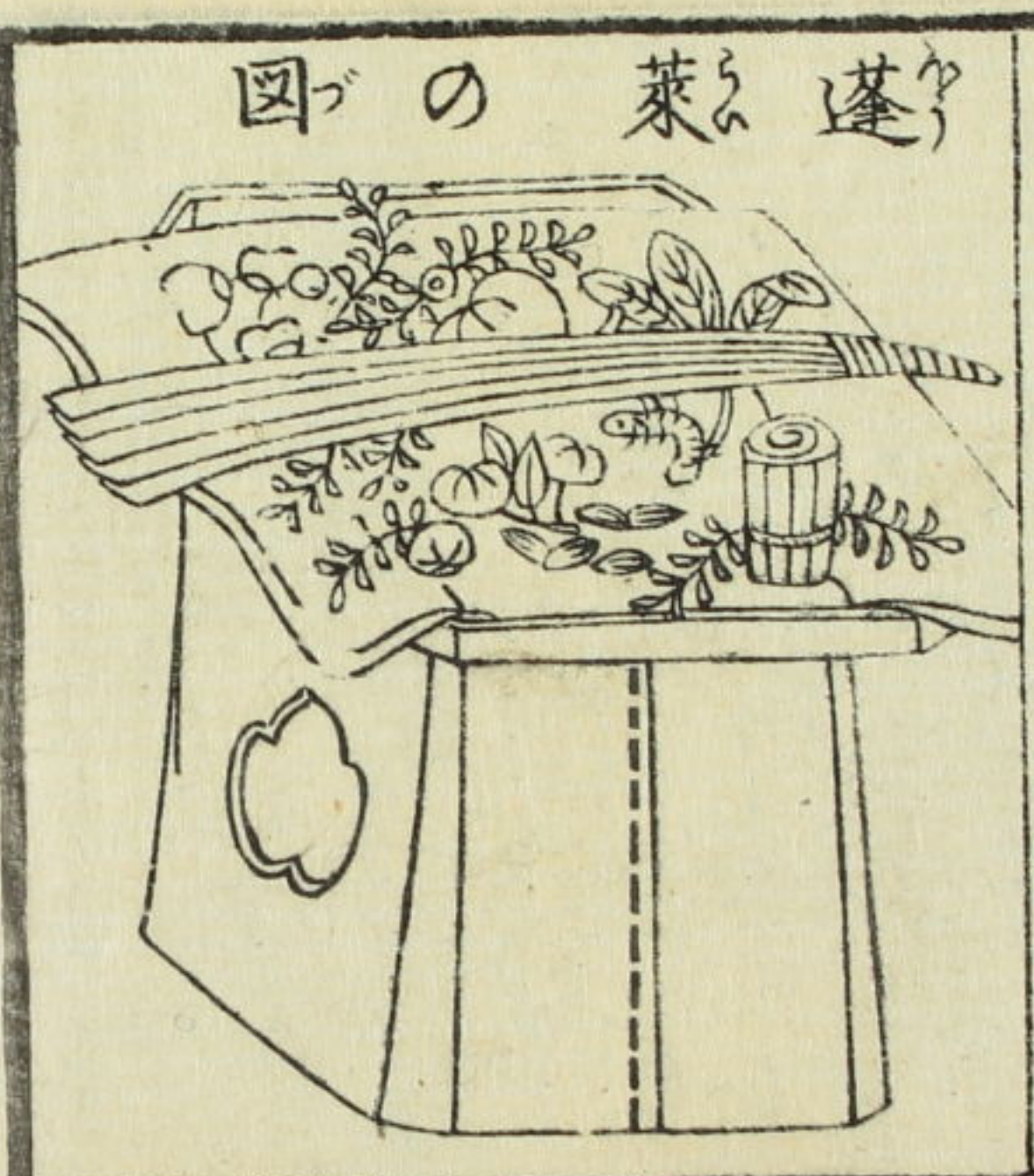
門の神棚 在家の妻戸ふ棚と
かきて祭る夜の土

器ふ灯をどろま 蓬菜いそふ
え侍る事まり

蓬菜島仙人の住處ふて此處の
菓物と喰へ不老不死と之依て

年始は命遠くと祝ひて三方ふ種々
の物とつゝ重ね蓬菜と名づる祝ふ

非 蓬菜やむれし海とやぬ 可友
○圖とる外諸礼 家本式の通りく



蓬菜の圖

狂 仙家のいもりのうまきいまり方はい
蓬菜庭む着ぬけの朧月山人

△蓬菜 三方の臺のあり
る所と正面とひるこ

△橙 実むまは七八年おれ
代々つく故祝ひの物とん △穂俵 ちんちん

△搗栗 搗の字と勝ふりて万事 △みぢん
ふかちんちん心はまていそふ

△梅干 梅宝珠といふ △榎 ぐへん壽命
玉の心といふ △櫃 とのぶ物と

△柑子 △ころかさ △昆布 乃一

△柚 △野老 △海老 △橘 △串板

右の品々かざる心とよむりかざる心といひ
春ふて元日の季なり 右の内委三
由來のあり月の次ふりくあるけ

狂 みえり道たのくところの名
道と松といはしちとわせいあひ貞柳

食積 蓬菜の飴はふい今如く目
出度りの故蓬菜の積かき

非 菓とのと喰へ長壽と得ん心
あつくと答積あはまぬけ 嵐雪

狂 初志と終ふ蓬菜とんちりぬ
まの心といふさつさつたり 丁二

海老野老

二品とも老の字と
あやうり用さる

殊小海老の腰のかみさるの
よりよひ長く腰のかむも

長命めで老人事と縁の祝ふ
非いせ多びの傍もゆじ神の春親重

神馬藻

神功皇后異国とせり
ゆつて海中の藻と取て馬と牧也

神の馬ふよとてこれを傍らり
又和訓小穂俵といふを以て穂も

俵もめては物なればとて用
ゆらるるべし民俗をまうてやん

やるといふ(非)わらや 橘 冬も緑
祝儀表とる名も橘

変らず其実赤さめあるゆへ
祝ひの物とすむし諸兄公お始

橘の姓と賜ふもこれを祝して
非橘はさよとまの傍りか安正

齒朶

裏白 齒よりひとも朶
山さといえどもよむらひ

長くえごとのづるといふ意とて是
と用るゝ其上齒朶は雪霜小も存

まご昔きりのさき 紅 親子草
ハ春の祝ひ用る

代々と譲り子孫長く繁栄の儀
とて橙紅と並べ用る代々あ

るゝ其内か死する意味あり
死の字さゝひの人の忌思ふべき

とも常とありて人驚く事あり
唐ふかりる斬有十思の座敷

を建さる折節天台の淨慈寺
れ書記濟顛とい僧の通るわ

せいに主人あそ今日家移り
せは吉事の祝詞とて玉の

請ふ濟顛よりわへど大音ふ云く
子有て親死し夫死して婦死せ

此家より千口の葬と出さんと
とて走ら出られり主人甚ど怒

つて新宅の祝詞と云ひ却て死
を以て葬と云ふ追ひて一棒と興
来まじ僕も余す其中に老人有
て申すはこれ大不吉語なり必
怒りあへば後子有て死せば子孫
を絶ト夫死して後婦死せんこれ
順道なりこの十畳の座敷よ
そ千人の葬と出さんことい
これ年数を歴さんばあふ事
にあらざるは目出度語にあ
るなりはといふは主人大小さ
らうて濟顛ハ凡僧あはさば
事とありまきく尊ひけるや
うやあともめて世間の物忌ひ
まらまらと云ふべし

新撰六帖 有家

春こゝろにましかるぬゆつちの
ゆめふと云ふも若くは老くも
非ゆつちまやに非小
家の大りなり 親重

雑煮 冬年の製置る餅
種々の品を加へ羹として

喰ふ其品國々家々の嘉例
アそ大同小異ありその加ふ品と左記

芋頭大根 芋子焼豆腐 かし栗
昆布 ありい 煎海菜 さらめうき

牛房 あらめ 鱈 田はくり
非 餅 雑煮は雑煮は云ふ山宗阿

狂 儀 雑煮と云ふぬ人い
腹のさる者と云ふ人あま

羹 祝 羹は雑煮調へ煮るあつ
もの云ふ即雑煮の事

祝 結昆布祝 心と祝
元日なり 云心と元日祝

芋頭 万事の司頭なる心と祝
又頭といふ字ハ大学頭藏

人頭をくくおあ人乃名
よふゆ元日は祝ふるなり
料の 兩のあとも書年始に
遺小ヤコトのなる

太箸 △羹箸と云 おまきざつと云ふ
年始の箸はゆきを御用ひ

開小豆 豆と水煮めて大根と
酢とくわいて雑煮
祝ふかたつらひとつと云開く
といふいさひのあはれなり

開牛房 豆と同心に開いて血
ふりゆへ名つくる

加賀御州 大内にて餅の上丹
とく大根をよかり

加賀御州 素 さら茶の中にもさかみま
やがてまのきふそあえはらひ

棘飾 子孫繁昌と云ふ祝するこ
数のまきと云ふ光嘉

押鮎 鮎ハ異名年魚といふ押鮎ハ
塩あひと年始の用ひ

俵海鼠 佐第土 見へり
さうさんと申さると余多あり
非 たりと云ふは枝

小殿原 △田作と云ふは
いさしれ事なり

海羸 海中のきり海蜘蛛の身
元日の祝儀といふ

螺肴 夏もも多く 出るもの
非 あり文鱗

掛鯛 元日のかきごのうへは
干鯛兩尾とくける

とろ鯛 元日かきごのうへは
國よりその其例

葩煎賣 昔は元日かきご
家内かきご

羊男 年越の豆とまき正月の
儀式といふと云又其
羊の十二支かきごのうへは

大服 魚茶の名の服の字忌服
の服乃字と不吉ゆへ元

日小立一茶と大禰と云て祝
非 たりと云ふは

日小立一茶と大禰と云て祝
非 たりと云ふは

日小立一茶と大禰と云て祝
非 たりと云ふは

日小立一茶と大禰と云て祝
非 たりと云ふは

日小立一茶と大禰と云て祝
非 たりと云ふは

狂春來れりるを春の別名とて
若の大方く入るをみるか 入安

若水 △洗井 △華水 △若水 桶
△初水 △井開 乃事

公事 △立春 △水をいり
連能 △元朝 △水をいり

連 △水をいり △水をいり
非 △水をいり △水をいり

福藁 △福藁 △藁 △福藁
△福藁 △藁 △福藁

庭竈 △庭竈 △庭竈 △庭竈
△庭竈 △庭竈 △庭竈

福鍋 △福鍋 △福鍋 △福鍋
△福鍋 △福鍋 △福鍋

幸木 △幸木 △幸木 △幸木
△幸木 △幸木 △幸木

鬼打木 △鬼打木 △鬼打木 △鬼打木
△鬼打木 △鬼打木 △鬼打木

毘沙門功德經 △毘沙門 △功德經
△毘沙門 △功德經

若戎 △若戎 △若戎 △若戎
△若戎 △若戎 △若戎

星佛 △星佛 △星佛 △星佛
△星佛 △星佛 △星佛

懸想文 △懸想文 △懸想文 △懸想文
△懸想文 △懸想文 △懸想文

星九曜星 △星九曜星 △星九曜星
△星九曜星 △星九曜星

星佛 △星佛 △星佛 △星佛
△星佛 △星佛 △星佛

星佛 △星佛 △星佛 △星佛
△星佛 △星佛 △星佛

星佛 △星佛 △星佛 △星佛
△星佛 △星佛 △星佛

星佛 △星佛 △星佛 △星佛
△星佛 △星佛 △星佛

星佛 △星佛 △星佛 △星佛
△星佛 △星佛 △星佛

星佛 △星佛 △星佛 △星佛
△星佛 △星佛 △星佛

星佛 △星佛 △星佛 △星佛
△星佛 △星佛 △星佛

星佛 △星佛 △星佛 △星佛
△星佛 △星佛 △星佛

賣

懸想文といふ元日寅の刻より町々を賣て通る赤

袴立烏帽子とあつて是は錢とあえはまへ女れあんのめで

洗米とあえくろく今とて

句へあまう文縁ぼきの早くあまきやうに祈る陰陽師乃

祝文よりまね元業の艶書のこと

狂人のいれを多しあけまう又

初雞 元朝のそりれ声なり

稲積 稲を積むを積む

稲あら 稲つむと同心なれあ

初夢

大晦日夜より元日あつ

夫木

西行

年をまぬ春米べとらあひ孫の

三物連歌

元日宗匠の家

とふ者或は弟子集り句とあ

しん三ッあへくゆるゆへ三ッ物

とつり是と板木あわりて

市中と賣る事あり今を

と作るをり△裏白連歌を

古あやまりて片面と書脱し

又一枚と添て五枚とあせり

そのゆへは片面白紙なり
是と例とてかき名付たり

三物俳諧 右連歌亦同ト又
裏白俳諧も有

元日異名註 正月朔日と
元日といふ

元といふ字をト免とよむ由へ
そトめれ日といふ事△元三

といふ事ハ年月日のごと
といふこと△四始といふ年月日

時の始といふ事を△履端と
いふ履いふむといふ字端は

トめといふ字義あり春ハ四時の
初めゆへそト免とよむといふ

事にて元日と履端といふ△新
玉乃年といふ改年といふ

さるべし万葉ハ荒玉の年と
あり玉といふものいたがれ

内かれば年のそト免と
いふかゝといふ事さるべし

元日 歌連 俳諧 在哥詩 手紙
故事 いろいろ

⑧ 夫木 俊成

九まやあけく履ふむとされの
そをといつめら子代の祀も

新撰六帖 光俊

今初まればとるおとあがすり衣
さるならそむら初のま川風

家集 元日聞鶯 西行

志めくひてそるおの松ふきて
まの戸わんふ考乃しそ

夫木 為家

年の内かまはましとわく玉の
そめくひてそるおの松ふきて

六百番哥合 慈鎮

百おやまをひうつるさうけに
とみら子と世の親ぞうつまる

拾遺集 赤人

きのふそをひいれいけまうほを
とみら子と世の親ぞうつまる

三朝 道遙院

立かゝるまのたかやとえり代の
月日れそ免ちのけとる

詞子代はしら。早成とあり。春のそよぎ。初日。天の戸をあふ。あふくぬの。春来る。よふもく。夜もまじく。夜ものぞふ。いとよとほき。うぐ。いとこそふ。まはるはく。とらづ。代のをふ。君が代。勸けよのま。くよのま。四方はま。このあし。鳴る。年。まくら。む。新。三年。連。中。ま。く。流。ふ。も。や。朝。の。海。冒。林。響。ひ。声。や。群。山。の。く。乃。春。冒。林。去。の。ま。ま。も。け。し。知。る。庭。外。宗。長。更。なる。神。代。の。ま。ま。り。外。絶。也。ふ。こ。て。書。け。井。の。新。屋。省。相。非。え。お。君。代。の。ま。も。も。守。武。十。徳。や。い。ち。結。ひ。く。乃。春。友。元。ま。ま。目。を。又。う。く。の。始。う。ふ。和。及。初。夕。の。今。あ。じ。し。と。ね。ま。宗。因。元。日。の。回。あ。じ。日。も。あ。れ。芭。蕉。酒。中。の。路。に。似。う。け。ま。の。ま。全。

元日詩 五字對句

同上

百靈滋景祿 花柳三春節
ヒラノレイニシケイソクヲ ノハリク レシノセツ
 タミケリ サイバ

萬土慶維新 江山四望雲
マントケイスイレンヨ コウサンレバウノシモ
 シニツト

元日詩

七字對句

詩礎

春歸鳳沼恩波暖 日月光
ハルカヘツテ ホウゼウニオハフタカニ
 林 中 ノイケ

曉入宛行瑞氣寒 建寅春
トキカキイシテ エニカウニスイキサムレ
 曉 行 瑞 氣 寒 建 寅 春
 トウニムセフ

花堂翠幕春風至 萬國同
クハドウスイバク レンフクイタリ
 ハレイナザレキ

繡閣金屏曙色開 繞黃圖
シウカクキンペイ ショヨシヨクヒラカ
 カカヤヤレキ

元日詞

張說

元日今歲樂 今年ハトリワキ
元 日 今 歲 樂 今 年 ハ ト リ ワ キ
 春 ラ ム カ ヘ テ 安

不謝往年春 去年ノ春ノ
ナリ 不 謝 往 年 春 去 年 ノ 春 ノ
 樂 シ ガ ル ト ハ

知向來心道 來ノ年イ
コトカハ 知 向 來 心 道 來 ノ 年 イ
 リ ナリ

誰為昨夜人 人情今朝
カニア 誰 為 昨 夜 人 人 情 今 朝
 ランヤ

昨夜ニ似
カルトナリ

詩 元日詞

蜀地寒猶

暖外地ノ中テ蜀ハ寒氣余所ヨリ暖カナリ 正朝發早

梅都ハ巴二梅花発ケバ偏驚万里

客コレヲ見テ蜀其外已復一年來外國ノ旅客又驚已復一年張說

來春ノ早ク至ル今又一年 張說

詩 元日詞

元日賜群臣栢葉唐ノ制ニ

酒ヲ進ム又栢ノ葉ヲ賜フ武平

歲時記ニアリ栢ハ仙菜ナリ

綠葉迎春新栢葉ノミドリモ春

寒椒歴歲寒枝葉トモニ寒シ

願持栢葉壽仙菜タル栢葉ニ

長奉万年歡恩賜ノ栢葉ヲ捧

奉和正日臨朝應詔天子朝廷ニ

詔令ニ應スルナリ

揚師道

詩 元日詞

右ニ同

居間無賓客起只如常地

住居スバ春ナリトテ賀シ來ル賓客

モナクハ朝トク起キ出ル平生モカクノト

ナリ 桃符板符隨人換桃符ノ製モ人ニ

タフハ 梅花隔年香年ノ内ヨリ發

春風回笑語雲氣十豐荒和

ハ人ノ笑物語ルニ似タリ祥 栢酒何

勞勸心平壽自長心中平和ニ

ハ壽命自然ニ長クシ仙菜ノ栢酒ナリト

テレイテスムル苦勞ハ無用ノナリトゾ

詩 新歲戲作 室廬景

莫笑腐儒生計貧儒者ハスギラ

貧シトアガケリ今朝富貴耐

笑フ無用トシ 今朝富貴耐

新中々貧賤ニハナシ林頭千卷人

間樂瓶裏一枝天下春餘多

書アリテ此上ノ樂ナレ瓶ニイケレ梅

正月日令元日

正ノ年

詩

壬午新年

同

龍州蘆

雪後庭前柳絲黃春暗生雪ハ

ミレバ庭前ノ柳シゲリ絲ヲタル、
葉ノクセ付テアルハイツレ春ノシルシ

ナリ預知佳客到喜鵲兩三聲ナリ

龍ノ声ノヨロコビレク啼ヲキケバカ子チ
年始ヲ賀シ来ル珍客アラシトヲ知

狀賀新年之文片カハ尺牘

春陽之清若地身依中納紙

新トニ鳳紀之慶

先其止地涉家心々物

先知 貴春

深為喜盛深 爲喜盛爲 喜盛喜 盛盛 戸中無

健履正且

深為喜盛 戸中無

深為喜盛 戸中無

深為喜盛 戸中無

深為喜盛 戸中無

深為喜盛 戸中無

深為喜盛 戸中無

深為喜盛 戸中無

深為喜盛 戸中無

深為喜盛 戸中無

深為喜盛 戸中無

深為喜盛 戸中無

深為喜盛 戸中無

深為喜盛 戸中無

深為喜盛 戸中無

深為喜盛 戸中無

深為喜盛 戸中無

深為喜盛 戸中無

① 更捧半箋 寄賀辭 ② 不勝相

祝 ③ 聊此由賀 ④ 為以祝壽之

證 ⑤ 任遲日 ⑥ 他日期春遊 ⑦ 須

約 ⑧ 尋芳日 ⑨ 不勝九頌 ⑩ 臨措快

々 ⑪ 阿硯皇恐 ⑫ 拜替首 ⑬ 頌

首 ⑭ 不備 ⑮ 誠恐誠惶 ⑯ 死罪々々

⑰ 新年之文返事 ⑱ 漢文尺牘之

為 ⑲ 年南之由祝詞

早 ⑳ 辱 ㉑ 誨 ㉒ 章 ㉓ 賀

新 ㉔ 札亦見任以以作

三 ㉕ 朝

於 ㉖ 法交月あ度戸 ㉗ 納以以

万 ㉘ 壽更任命 ㉙ 記得

長 ㉚ 法家自表は ㉛ 家

貴 ㉜ 府門庭各佳健

成 ㉝ 涉跡歳杯を存を ㉞ 控約

多 ㉟ 慶頻至將俟

永 ㊱ 湯 ㊲ 耐人 ㊳ 名 ㊴ 將 ㊵ 漢 ㊶ 之

三 ㊷ 春之行樂 ㊸ 謹此伏候

早 ㊹ 辱 ㊺ 速得賜書 ㊻ 伏兼 ㊼ ①

兼 ㊽ 札示 ㊾ 辱枉 ㊿ 已蒙 ㊽ 誨章

① 教示 ② 來書 ③ 珍牘 ④ 家鴿

三 ⑤ 朝 ⑥ 履端 ⑦ 淑節 ⑧ 任命 ⑨ 若

論 ⑩ 蒙命 ⑪ 貴府 ⑫ 仙縣 ⑬ 錦里

⑭ 邦郷門庭 ⑮ 邸第 ⑯ 澤家 ⑰ 黄堂

或人の説は年始狀の結語は期永

日之時侯あつて期永陽之時侯

と世間普通は書來ても期永

日侯と云ふて濟しと云ふ之時

の二字重言のやうかゝる人

侍るとも尤も有るべしと云

〔狀〕新年自作の詩哥と送る文

新曆まゝ吉兆きしやう奇き之の体たい終しま以も今いま朔げつ

朝来あした

甫ほ歲さい上の上休やすみ兆しやう

竟あはれ花はな競あはれ妍げん

寄よ鄙ひ詞し以も投な几こ下か

拜い乞こ慈じ芥か

甫ほ歲さい上の上鳳ほう曆れき中ちゆう三さん春しゆん卜う吉きち兆しやう

令れい辰しん上の上嘉か令れい朝あした来きた今いま辰しん發はつ起き

鶯う花はな云云黃わう鸚ひん繞ねり芳ほう樹じゆ梅ばい鶯う映えい朝あした暉けい

偶ぐ強きやう于よ時とき即すなは偶ぐ然ぜん寄よ作しやく賦ふ

述しよ鄙ひ詞し詞し章しやう一いつ絶せつ鄙ひ語ご野や詩し

投な呈てい污う奉ほう告こ几こ下か閣かく

下げ座ざ右ご顧こ盼はん拜はい恭こう恭こう

謹こん敢かん以も慈じ芥か潤じゆん色しき斤しん

正せい公こう請せい正せい不ふ律りつ不ふ真しん草そう不ふ宣せん不ふ悉しつ

〔狀〕同返事

涉せつ祝しゆ羽う之の玉ぎよ交かう和わ得とく見けん

朵た雲うん辱じやく嘉か辭じ

仕し以も何なに亦また花はな彩さい菊きく梅ばい花はな

鶯う花はな乘せう

保ほ長ちやう用やう必かならず字じ交かう交かう以も何なに也なり

春はる光ひかり遲おそ々々寄よ即すなは

與よ之の佳か唱てい之の恋こひ投な也なり不ふ存ぞん

事こと之の詩し章しやう興きやう趣しゆ

感かん賞しやう之の以も事こと不ふ法ほふ納なつ是こゝ

不ふ減げん古こ人にん暫しばらく留とど之の干かん

ヤ作望
案上アノ上ニ了ヲ了ル

采雲尺素尺書ハキツク厚命カタキミ無命ムシメ

嘉辞カセ壽儀シユイ祝詩シユシ壽章シユシヤウ鶯花ウヱカ

云クモ花開ハナハク鶯嬌ウヱウツク景悠然カゲユウゼン黃鳥日ウヱトリヒ

轉マシ白梅風統ハクバイフウトウ辱ハジメ被投ヒキウチ賜タマフ寄ヨス

即事ソクジ即興ソクキョウ對景タイキョウ任興ニキョウ樂感ラクカン

興趣キョウソウ風調フウテウ雅音ヤウオン不減フヘン古人コジン不讓フジョウ

暫留シヤムリウ敢作家珍カンサカサマ拜置ハイチ平座ヘイザ君キミ納露ノウロ重チユウ

右手紙ミナモトガミ必カナラシも丸マル不真字フマシジとつツつ

てありこの真字マシジ漢文カンモン尺牘シツク乃ナリ

内ウチの文章ブツキとゆき出イデ書替シヤガヒ又マタハ

異イ名ナあり上中下ウチナカノのありアリ故ユ

方カタ同輩ドウバイ目下メゲの書シヤあり併ヒナヒ

あり上中下ウチナカノの書シヤあり併ヒナヒ

見合ミアヒして書シヤ一ヒト

歳旦シヤウタン

書雜シヤザク

鮑宣ボウケン傳デン云クニ鶏ケイ書シヤテ

ハサメ百鬼ヒャクキオシル其上ウヘノ二輩ニバイノ索ノソク

ヲカケル之故ノユヘ二輩ニバイ索ノソク一ヒトモ云クニフナリ

仙木センボク

桃符トウフ桃板トウイタ桃梗トウキョウ皆ミナ同ドウシ

テコレヲ仙木センボクト云クニフ百鬼ヒャクキ恐オソルハ

所トコロナリ是コトヲ元日ゲンニチニ立タテテ邪氣ジャキヲ

フセグナリ桃板トウイタニ書シヤ法ホウ士シ民ミン并ヒナヒ

ニ儒者ニユウシャ僧家ソウカとて書シヤべき文モン皆ミナ

日本歳時記ニッポンシヤウジキ五辛ゴシン盤バン生菜シヤウサイ

ナドモ又菜盤ナドモマタサイバントモ云クニフ松栢椒ソウハクカ

花菜根ハナサイネ芹セリ等トドノ生菜シヤウサイ餅ホウナドヲ

盤バンニ盛シメリテ相贈サイキョウリシヨリ云クニ

本草綱目ホウソウコウモクニ葱蒜ソウサン蓼リウ蒿コウ芥カイ是コト

ヲ盛シメ饌ケンヲ五辛ゴシン盤バンとト知願チガン

イフ迎新イフイニシンノ儀ギヲ取トルルニ

商人シヤジン清湖君セイコキミニ女メヲ乞ヒヒ得エタリ

商人シヤジン欲ホシキモノ有アルテ求モトムレバ此コノ女メナ

ニ、ヨラス興へスト云フナシ依
 テ其名ヲ如願トヨフ常ニカク
 如シ然ルニ元朝ニ至テ如願ヲソ
 ク起キ出シテ商人怒リテ追打
 シニ糞壤ノ中へニゲハリテ其跡
 カタチナシ後人細繩ニ人形ヲカ
 ケテ糞ノ中へナゲイレ令ム
 如願ト云フヲナシケルトソ

椒柏酒

椒酒ハ椒觴ナド云フ椒ハ玉衡星ノ
 精ナリ是ヲ服スル屠蘇酒ヲ

モチユルニヒトシ
神茶樹爵壘 東海ノ
 度朔山

ニ桃ノ樹アリ大キサ三千里東
 北ニ二神アリ神荼鬱壘トイフ

ユノ神百鬼ヲクマストナリコレニヨ
 ツテ此圖ヲ画キテ凶魅ヲフセ

コレ本朝鬼門**放生雀**ヨリ
 ノ據トスルニヤ

歳朝ヲ以テ雀ヲ趙王ニ獻スカ
 ザルニ五采ヲ以テス趙王大ニ悦ブ

祈穀 漢ノ武帝ニ始ル天子五
 穀成熟ノ事ヲ天ニ祈ル

ナリ **粉荔枝** 米ノ粉ヲモツテ荔
 枝ノカタチヲツクリ

食スル **折七松** 歳ノ始ニ松ノ枝ヲ折
 ル男ハ七ツ女ハ二ツ

茶トシテ是ヲ吞ム **鐘馗** 唐ノ明皇
 ベシト薫勒ラリ

思来リテ明白玉ノ玉笛ヲヌスム
 明皇怒ラセ玉ヒ武士ヲ召ント

スルニ勿子一人終南山ノ進士鐘
 馗ト名乗リ以前ノ小鬼ヲトラ

ヘテ食ヒ殺シケルト御覽アリテ
 明皇ノ御夢サメテ翌日御腦頭

ニ愈タリ是ヨリシテ後鐘馗カ
 像ヲ画キ又人鐘馗ノ像ニナリ

テ正月ニ家々ヲ廻リテ祝フト
 ナリ此事唐ニモ久シク言傳フレ

ドモ附會ノ説ナリ委シク日本
 歳時記ニ論ズ見ル正説ナリ

元日 妙術
除年中病 去冬
山椒を隔て置

今朝丑の時より前赤小豆七粒と
右の酒ふて吞べ 年中病ふ

除邪氣 今日蒼木を焼ば年中
の邪氣を除く或は煎湯として

吞もよう 不老法 今日枸杞を
湯ふ入てゆめすれば人として光

澤ありし病む老す 治膿氣今
日小便を以て膿氣を洗へば右

瘡癩を辟く 麻の実七粒赤小豆
七粒井の中へいりて病難を除く

樹木 今日鷄鳴の比火をとり
てして樹木を見るべし此時ハ

いまだ虫まゝとて腐るる
枝葉のありまゝする所あり是

を取去るべし虫生ぜざる也 又元
且五更の時早く芥と持て菓

れ木を叩く或は切る斯の如く
すれば其年菓実を結ぶも多し

○鷄鳴のとき松明の火を添
木の上下とてをば出さるべし

元日寺社
祇園削掛の神事 元朝寅の
火をうけよ参詣の人おぼく一説は火

用はとる洛中洛外の家々より火の
晦日の夜とて一般舟院元三大師乃

画像開帳 ○六條道場天神自画
の像開帳 ○仁和寺北野兩所午王

加持 ○比叡山東塔の修正會 但
元日より四日まじり
横川 西塔八日迄あり

大坂 天王寺講堂秘密供刻の室
藏の朝拜刻の太子堂の法

事舞樂刻の金堂の万石米 西の六
時堂の重盞 西の修正音楽 西の

初春之部 日の定まらば
元日よりちりや上

初春之部 日の定まらば
元日よりちりや上

若餅 三ヶ日の内又ハ初春のつ
三ヶ日そちをいふ説ハ

小餅若餅云小字忌故雑法
非 餅の如くつゞき元辰

破魔弓 破魔矢 破魔弓

ひふ勝負をあらうまむりなり

弓のまゝのびるべし弓は不祥と

さうふりの神道とて采物の

中に用也哥あり白虎通云く

天子まゝく弓を射て陽氣を

たどけ万物小達とるあり

非 ちぬ弓や過海紅う四天王 其角

羽子板 胡木の子といつてつゞ

まぐさひなり秋のそとめ蜻蛉

といふ虫の蚊を食ふありそ

形をまひて板のせつと上と並

あつ時蜻蛉のこゝと世間回答

詞 △や羽子△胡鬼の子△胡鬼板△流る

△と糸つゝ 右の言葉ニ用ゆるあり

非 羽子板や箸あり △玉打

毬打 △毬打

△あつぐ玉△ぬぐぐ○毬打の厚さ

板と玉の如くあり是とつて

遊ぶ子供のりてあなび物へ。唐皇

黄帝と云人虫尤といふと亡めい

外虫尤の灵疫神とて人民をな

すや故虫尤が眼とつゞきと年乃

初なきらうとつゞきとくや。本朝

昔の年始上つゝふとせむとび

故日本紀も出づり。万葉集は

玉きりといふきりなり雑法

△あつぐ玉と打物之毬杖といふ

非 季といふ形むとる子外春益

宝引 福引とも云**非** 宝引小

蝸牛此角とあぐ之其角

年玉 早春小な物とあつと云**非** 年

玉やまのめいといふ物 式之

書初 試毫 吉書 曆小吉書

試筆 筆試 初といふ日あり

元日小より古例あり王羲之の書
初月義書あり 王羲之

日往月來元正首祚
正月のつぎひはりてしやう月

太簇告辰微陽始布
正月のつぎひはりてしやう月

盤無不宜和神養素
正月のつぎひはりてしやう月

詩書初 世間書をいふ

天筆和合樂地福皆圓滿
てんしつがやうてしやうくくくくくく

詩長生殿裏春秋富不老門前日月遲
ちやうせいだんらゝるはるあきゆふしやうらふしやうらふしやう

詩佳辰令月歡無極萬歲千秋樂未央
けいしんれいげつあそびなくまげんせんしやうしやうしやう

詩陽和入大履梅萼出枝條
やうわくわくたいふくばいがくいっしやうしやう

詩梅自發南面香猶到東簾
ばいじふはつなんめんかうしやうたうとうとうとう

詩黃金自充夕朱提忽納朝
くわんごんじふちゆうしやうしやうしやうしやうしやう

詩海内太平日扶桑安靜時
かいないたいへいじふさうあんせいじ

書初のこと

新古今

費之

若う代の年の教を白お乃
しやうじやうのとしのしやうをしろおの

非也和やわあふ紙もゆり色友声
ひやわあふしやうしやうしやうしやうしやう

あつり奈義あつり奈義あつり奈義
あつりなげあつりなげあつりなげ

あつり奈義あつり奈義あつり奈義
あつりなげあつりなげあつりなげ

天等々庭と深て和合樂 重頼
てんとうとうにわあはれしやうしやうしやう

狂八十の春をかくて 藤卿
きやうはちじふしやうしやうしやうしやう

いく子世もよふ任の江やる砂の
いくこよもよふにのえやるすなの

多ふ八と下れ 去年今年
たふはちとくだれ けんねんけんねん

△ゆの年△すひの年△ころん年
ゆのとしすひのとしころんのとし

△千代乃をれ△君がをる
ちやうたのをれきみがをる

右つぎは元日より年始の心
みぎつぎはげんじつよりとしはじめのこころ

毬流々 年の初小幼女乃
たまごころり としのはじめのこども

頃が始まるるや志れどく
ころがはじまるるやしれどく

と世より童女のよそを
よそのよそよりこどものよそを

びくまきくれ里懸打り
あへる物やうべり

御降 元日よる三ヶ日 三ヶ日
返の間の雨

非日小日に彩と松の内 正月十音
かまや二ヶ日無勝

五月十七日門ふらうあり 志内 松の内
由之江戸七日

春永 永自永陽と祝の詞 春ハ
日もあぐゆやう多心といは

非春永しんや藏開 非
烟のむら縄親重 非

湯殿始 歳初
を猫の付 浴す

非先娘しゆのい弓始
のさくえとめ井志

正月七日禁中御弓の奏あり
非去来人教引弓 初五音

公免始 説多神代抄
日見始あり〇又

飛馬始とい説用ひか〇又
火水始是と正説と〇深秘

非ふ代た万ま々々馬乗初
ひいめめ〇先春可

非ふありお小こ考 着衣始
ゆゆてて〇〇白可考

衣服と着き〇〇祝ひ三ヶ日
内ふ吉日と撰んで用ふ〇一説

競始と書て舟り〇瓜か〇〇
〇〇初る事もいい〇〇舟乗初

各別よあま〇〇前説と用ひ着
衣と〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

始の〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

春駒 駒と頭と〇〇〇〇〇〇〇〇
禁中白馬節會〇〇〇〇〇〇

非春駒や春子〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

年立や〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

年立や〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

狂（狂）礼（礼）未（未）是（是）て（て）は（は）き（き）と（と）い（い）は（は）き（き）と（と）く（く）

鳥（鳥）追（追）踏（踏）哥（哥）の（の）貴（貴）風（風）が（が）り（り）参（参）河（河）よ（よ）

人（人）の（の）鳥（鳥）と（と）追（追）は（は）と（と）め（め）と（と）り（り）

千（千）町（町）万（万）町（町）も（も）鳥（鳥）と（と）追（追）は（は）と（と）り（り）

御（御）長（長）者（者）の（の）御（御）内（内）へ（へ）お（お）も（も）す（す）の（の）た（た）り（り）

右（右）大（大）臣（臣）左（左）大（大）臣（臣）関（関）白（白）殿（殿）の（の）鳥（鳥）追（追）の（の）高（高）

追（追）は（は）と（と）り（り）と（と）い（い）は（は）と（と）り（り）

香（香）追（追）の（の）多（多）や（や）え（え）ん（ん）

来（来）て（て）目（目）出（出）度（度）哥（哥）と（と）い（い）は（は）と（と）り（り）

非（非）を（を）と（と）り（り）と（と）い（い）は（は）と（と）り（り）

非（非）律（律）代（代）の（の）民（民）や（や）腹（腹）軟（軟）う（う）つ（つ）信（信）和（和）如（如）貞（貞）

狂（狂）狂（狂）と（と）か（か）ん（ん）シ（シ）テ（テ）ワ（ワ）キ（キ）ホ（ホ）セ（セ）ん（ん）の（の）砂（砂）の（の）

松（松）と（と）り（り）と（と）い（い）は（は）と（と）り（り）

鶯（鶯）囀（囀）梅（梅）枝（枝）諷（諷）小（小）青（青）柳（柳）

詠（詠）小（小）是（是）ハ（ハ）皆（皆）催（催）馬（馬）糸（糸）の（の）詠（詠）小（小）物（物）の（の）名（名）

乘（乘）初（初）興（興）乘（乘）舟（舟）乘（乘）初（初）祭（祭）

舟（舟）乘（乘）初（初）賽（賽）と（と）い（い）は（は）と（と）り（り）

並（並）ぶ（ぶ）一（一）天（天）日（日）和（和）と（と）い（い）は（は）と（と）り（り）

真（真）直（直）め（め）て（て）水（水）上（上）お（お）ど（ど）る（ど）る（ど）ん（ん）

ら（ら）ん（ん）と（と）い（い）は（は）と（と）り（り）

祝（祝）小（小）事（事）と（と）り（り）と（と）い（い）は（は）と（と）り（り）

節（節）と（と）い（い）は（は）と（と）り（り）

朝節外節親戚宴會とてして
節振舞と云ふは往來するて

新春の賀節と祝ふる尤令節
毎に祝ひ祝ふ事年始の限り

どことぞ正月一年の始めたる
也を以て格別な節といふ正月

の事と守祭といふは葵祭花と
いふは櫻の事とするが如し

狂言もさう系より小鯛焼りの
串ふもぬる春のちよもい保友

節小袖 （非） 毛もさう正月さ
う小そぞろか 正信

狂言のこころとておあま小袖
くもも苦んせむは保友衣 正信

枕飯 東鑑に云く今日千葉之
介これを沙汰すとあり

當月武家の節といふなり
状節振舞ふ招く文左ハ漢文大腕

枕飯 （非） 毛もさう正月さ
う小そぞろか 正信

緋のゆき （非） 毛もさう正月さ
う小そぞろか 正信

裁は衣人る （非） 毛もさう正月さ
う小そぞろか 正信

鱈 （非） 毛もさう正月さ
う小そぞろか 正信

水祝 （非） 毛もさう正月さ
う小そぞろか 正信

簞築簫 （非） 毛もさう正月さ
う小そぞろか 正信

尺八笛類 （非） 毛もさう正月さ
う小そぞろか 正信

舞初 （非） 毛もさう正月さ
う小そぞろか 正信

正月十七日禁中

御舞初あり舞初ハ能初ハ
ハハ舞舞舞のそハをるハ

御慶 年始の祝ハの言葉
ありハハハハハハハハハハ

履新慶 始めの言葉ハハハハ
ハハハハハハハハハハハハ

事ハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハ

淑氣 初春ハ立ツ一氣あり
年始の言葉あり

歳旦句の祝 歳旦の字義ハ
ハハハハハハハハハハハハ

つねハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハ

義ハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハ

氣の物ハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハ

上子 初子日
△子ハ日遊△小松引
△子ハ日松△初子ハハハ

の玉箒ハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハ

小松ハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハ

○今日泰山府君の祭りの日
新古今 俊成

ハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハ

夫木 同

おもひきね子れね母さうそんて
君とていつくよ志のの小あまを

文治百首 定家

何ゆゑふ和子の夕ふれ小松ぞく

去のまゝゆゑを繋りそあかん

夫木 兼待子日 寂蓮

ふとせ會ん子れ日の友を頼めても

松いへるさたあうかりたり

家集 社頭子日 清輔

松をいさ神のさびらけ子日よハ

さう本城子代のためよいせん

續古 雪中子日 土御門

あう君のまゝあへねつべの小松系

引ひねね乃をまゝ見へはく

久安百首 隆季

あうしつる去の和子ふあうはう

志川の丸巻ふまをささうり

詞引をさうさ川様をせみさう

みづか子世の色さうり。二をなね

山の松。○山山の松を引野野の松を引

庭庭の松を引アアの松を引雪雪の松を引

友友の松を引子子の松を引子子の松を引

友友の松を引子子の松を引子子の松を引

友友の松を引子子の松を引子子の松を引

友友の松を引子子の松を引子子の松を引

友友の松を引子子の松を引子子の松を引

友友の松を引子子の松を引子子の松を引

友友の松を引子子の松を引子子の松を引

友友の松を引子子の松を引子子の松を引

友友の松を引子子の松を引子子の松を引

友友の松を引子子の松を引子子の松を引

友友の松を引子子の松を引子子の松を引

友友の松を引子子の松を引子子の松を引

友友の松を引子子の松を引子子の松を引

友友の松を引子子の松を引子子の松を引

友友の松を引子子の松を引子子の松を引

友友の松を引子子の松を引子子の松を引

友友の松を引子子の松を引子子の松を引

友友の松を引子子の松を引子子の松を引

友友の松を引子子の松を引子子の松を引

友友の松を引子子の松を引子子の松を引

友友の松を引子子の松を引子子の松を引

本三立ヨレ春ノワカミドリ手ニラツル

手折梅花挿頭二月之雪落衣

梅ヲタラリテカサニニスバ雪ノフルハウナク

玉簪

たまごさきめざくの草ふ小松とさう
そへて家とられたむらこ

そへて後成卿の口傳小田舎母

かひつゝふこととさうふ初春子の目

簪に松をゆいふてこころいふと

掃くといふ玉といふちりる詞なり

蚕を飼ふ家

子日衣

子日衣こひひのころもろ日小
服と名づく

の祝儀さう

△梅の花衣△鶯衣△柳の衣のいろこい
のいろこい

△鶯袖このころもろの衣の袖なり

若菜

△千代名千代名ちよひな
△磯若菜いそわか

△初若菜。七種若菜。十二種の若

菜あり。七種のいけつとさうちりる

昔子の日かつこころ中世より七日

誹詩別と七日の古歌より若

菜といふ度七日の外五十七日小

貫古今

去日けく若菜搗や白あめ

神さうとて人のゆつらん

家集

好忠

さう菜もさあらんやもまもそへ

さうれつびさささうちりのふ

夫木 雪中若菜 仲正

さう菜乃雪いひつはさみたり

夫木 独摘若菜 仲正

若子あまのやけ母くさあまあ

神くも人をさそいさうたり

御集 朝若菜 後京極摂政

若人々のたれれとさうし若木

おちあさういあ菜とぞつひ

万葉 若菜 赤人

あひさうい若菜つまんをさう若木

さのふさくを雪はさうつ

夫木 山家若菜 兼盛

あひさの山うさうさうあ居ま

若人されまうささをそはひ

千首 水辺若菜 同

あさあのをけさうさうああ

つまぬみうひてあさあさう

詞つひあさ。下巻の邊破のまか

若菜つひ。淡菜つひ。野のむらあ

詩七種詞五字對句 同上

官樹千花發 九重中禁啓

階賞七葉新 七日早春還

臘司より禁中奉る或ハ或ハ

十二種供る由公事根

冠見へ唐古七種の菜

羹を食して病とのぞく

荆楚歲時記あり然共

何の草し本邦の

七種も諸説ま寛平

年中の哥み寛平

うそすい

とく七文一首

ぞりなひのぞ

あらを七

△幣ハ水早芹の二種通用

△東風菜と名づく

哥書ハ千草という△こ

△こ△こ△こ△こ

△こ△こ△こ△こ

△こ△こ△こ△こ

△こ△こ△こ△こ

△こ△こ△こ△こ

△こ△こ△こ△こ

△こ△こ△こ△こ

△こ△こ△こ△こ

△こ△こ△こ△こ

△こ△こ△こ△こ

△こ△こ△こ△こ

△こ△こ△こ△こ

△こ△こ△こ△こ

△こ△こ△こ△こ

△こ△こ△こ△こ

△こ△こ△こ△こ

△こ△こ△こ△こ

△こ△こ△こ△こ

△こ△こ△こ△こ

△こ△こ△こ△こ

△こ△こ△こ△こ

△こ△こ△こ△こ

△こ△こ△こ△こ

△こ△こ△こ△こ

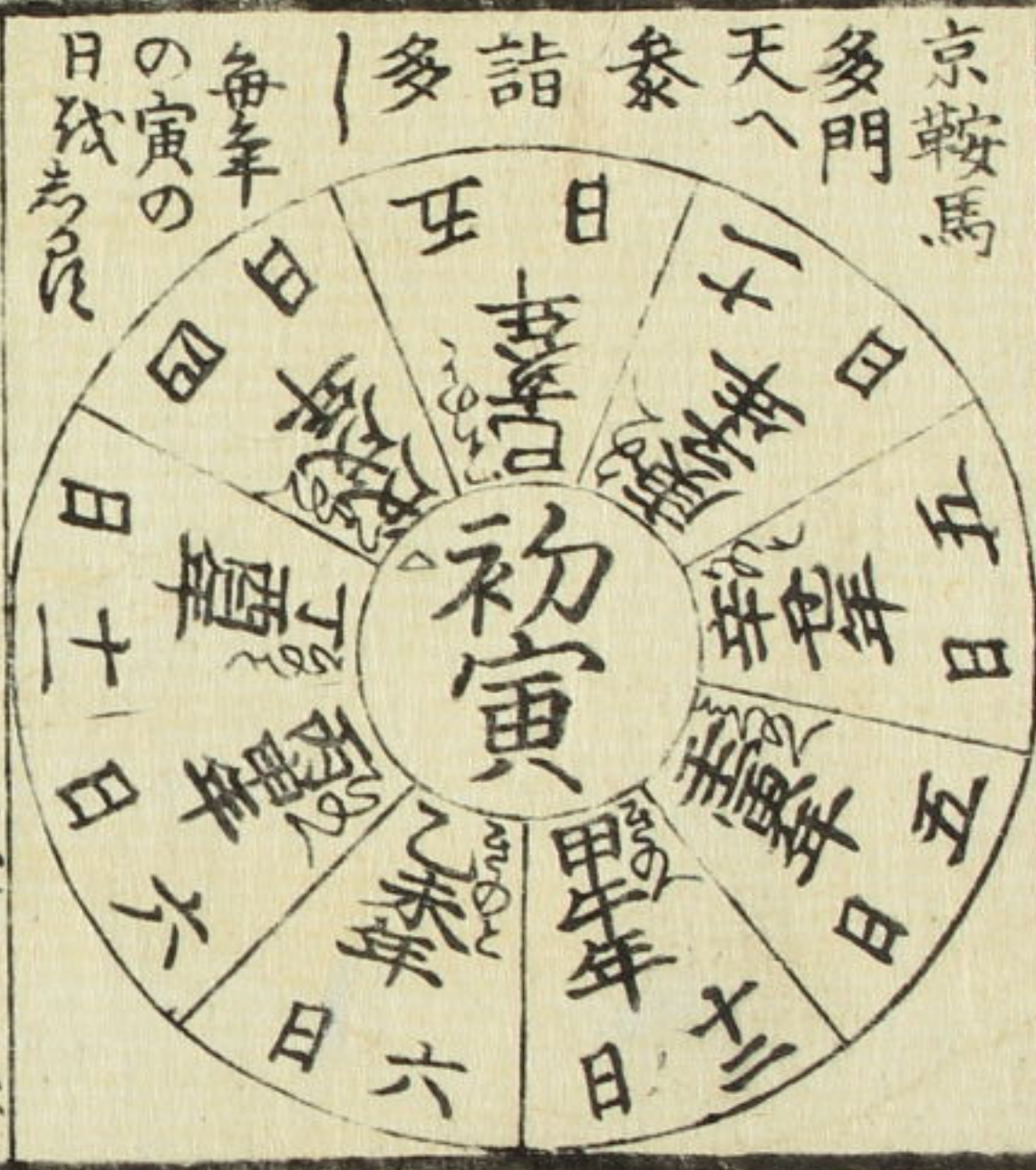
△こ△こ△こ△こ

△こ△こ△こ△こ

△こ△こ△こ△こ

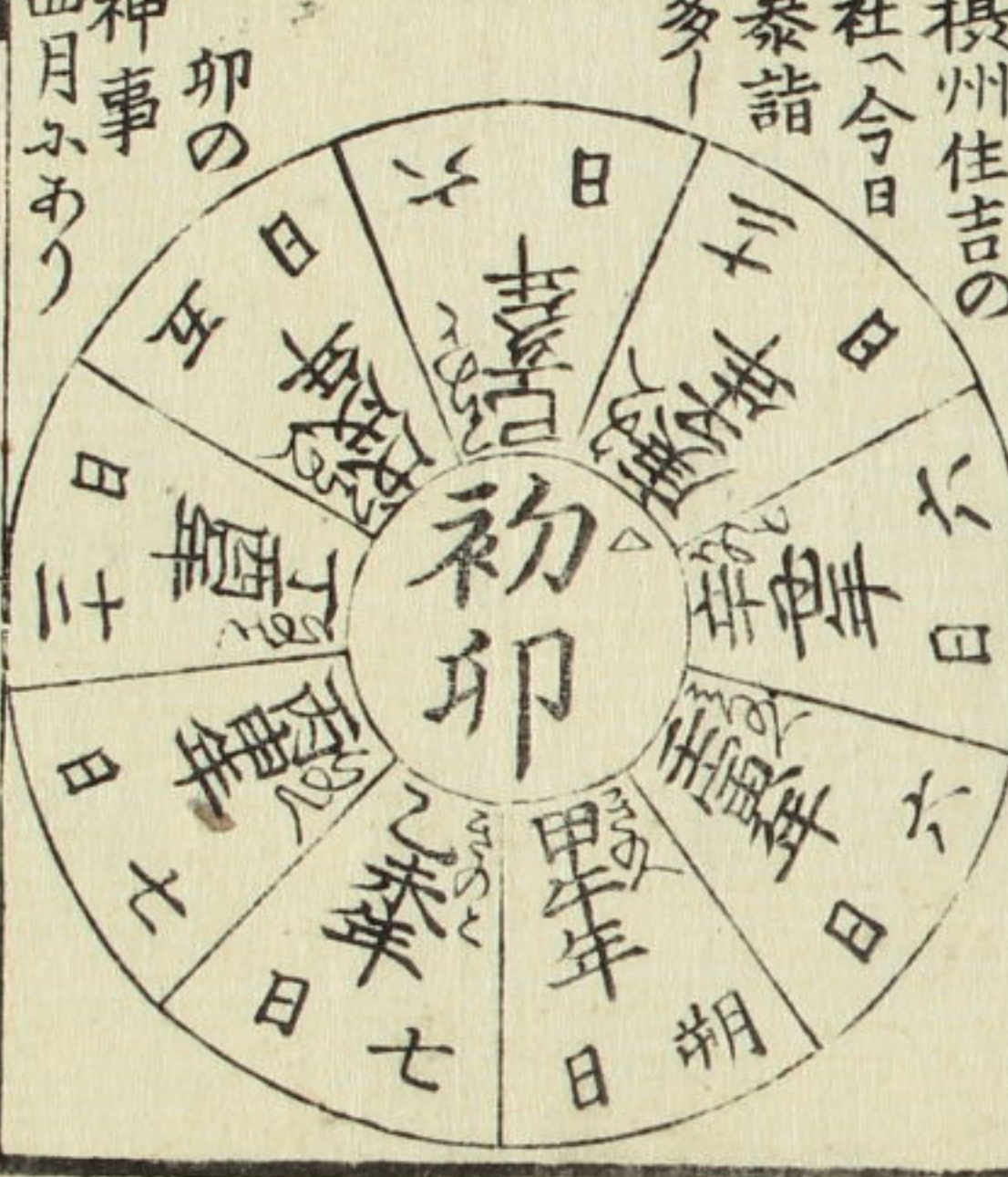
△こ△こ△こ△こ

病を除く見へる



△ふごもろー... 御杖。卯榎。持統天皇三年... 卯杖。卯日大學寮より杖八十枚奉

事日本記又出たり祝杖を献て邪氣と追打り源氏物語卯榎の事あり是れ系所より献す糸もなごり同く邪氣と拂ふ物と同時小献とる事なるべし



上辰日 虫鼠を辟く今日虫鼠のかよふ穴をふさげばあがらむ其外人家に害ある虫鼠のたぐひ再び来る事る

日未上

邪氣を除く 蘆火を持って井ぬら

廊の中とてくせい邪鬼皆走去る

祝詞 新禧休北喜事日漸
新社駢臻無勞茲蔡

占ひじて目出度事^知二 今日て

て有と云夏蔡ハ龜占^日 狗日と云

二宮大饗 二宮とい東宮中
宮の御事なり

公卿以下二宮よ参^{公事} 朝

て拜礼ありて饗ふ^{根源}

觀の行幸 是ハ天子年始のこ
ぶとくして上皇井小

母后の宮へ行幸る事なり公事

根源よ出朝觀の二字ハ礼記有

臨時客 攝政関白の家小大
臣以下の公卿を招

らして遊びぬ^{定まる}公務小わ

らざれ^{臨時}の客と申す^{源氏}

物語ハハ^客とあり御ゆ小

るど有てさい^楽器

を用ひ^て野曲の人も^{拍子}

かて^てとい^り 羊中行事^合

わら^るの^るは^遊び^のれ^そと^ど

梅^がを^うふ^ふを^いさ^つゆ^る

詞^神と^つ縁^はま^てある^大人

は^のそ^で宿^のも^とび^あを^と視^み

告朔 論語ハ朔を^{廣小}告ふと
す^り毎月朔日百官の

行事を^あり^て天子の^殿懸^景

入^るなり^當月の^政多^とゆ^へ今日

或ハ四日^をと^り行^るなり

羊中行事を^祭る^のう^ちを^ける

わ^らふ^のも^とは^縁を^たと^り女^房

非^音の^れや^の年^は長^良交

摩那切始 高橋大隅の^兩家
是^と行^ふ夜^のり^と

商初^め 買初^め賣初^め家^{より}
三日四日^をと^り有

非^常なり^和の^酒
此^君 京^天狗^酒

六原愛宕寺門前の強刺の宴
つらつと祇園會社の定む

堂中小太鼓ありこんをたき螺
と吹甚とさかかこゆ天狗さり

りりつみ〇東西 大坂 船玉
本願寺松拍子 祭

船持舟玉 近江 鳥つるさの神事
の神とまゝ 鳥つるさの神事

鳥つるさの神事 三 今日で猪日とす
あつて毎年 日 不成就日〇今日

江戸御諷初 たり薬 千瘡万
老松東北高砂 病膏を

銀器ふ入て天子小奉る無名指み
つひて御額并小御耳のうらに付

らつとぞ延 京 北野裏白の連
喜式ふ出り 歌〇比叡山横

川西塔元 大坂 天満石
三大師會 不動衆

四 今日と羊日とふ〇開基の福
日節とふ今日と羊の基と開

沸 今日三月供する餅と菜等とを
いれて喰ふ福沸といふ祝の詞

〇餅の異名と福生果といふ故りらの粥
と福沸といふ也〇又七貝喰餅菜の也

〇福沸と云〇又香 若水と湯と物と煮ると
〇福沸といふ也〇又香 若水と湯と物と煮ると

かえ開 神前吳前かきと其外家
餅と餅とと鏡餅といふ今日七日

十五日等いして喰ふ〇開といふま
まありまるといふ忌詞故にやといふ

〇今朝向ふ系かきものらつら光廣
百髪と香 今日 京 飛鳥井家

難波冷泉の 大坂 天王寺芹田
両家皆同日 坊の修正會

五 今日と午日と守れとらふ榮地
日 ある人の農人禮と勸るなり

天氣 雨れ五穀の叙位 五日
は蚕ふいあし 六日

白髪と香 今日 京 飛鳥井家
の蹴鞠始

難波冷泉の 大坂 天王寺芹田
両家皆同日 坊の修正會

五 今日と午日と守れとらふ榮地
日 ある人の農人禮と勸るなり

天氣 雨れ五穀の叙位 五日
は蚕ふいあし 六日

白髪と香 今日 京 飛鳥井家
の蹴鞠始

難波冷泉の 大坂 天王寺芹田
両家皆同日 坊の修正會

諸臣の年薦を奏し次 **木造始**

弟の位を叙する事あり **萬歳** 五日禁裏へ来行事 千壽萬歳

といふたり 一條院の御宇大江の定基三河守に任じ其民より

乞へて佛教傳來の因縁をのぞき舞ひこれをもとめとことたり

非 和去のふれと名を方春ホ **聖** 狂万歳は後いともふ **猿引** 是も今日

八百八十四支 **猿引** 禁中采

やせり 不白 **京** 東福寺 引らぬ **漢の画** 大坂 天王寺太子堂 像掛り 生身供十四日也

六 今日と 馬日と **六百年越** 七日八式目也 今日といふや

京 高其堂寺 方丈懺法 **江戸** 浅草寺 修正會

近江 山王三宮七 此日岳小登り 神事能日 遠く四方と美

陰陽の気と鎮ふ事を得て年中の煩惱を除くの術也 萬華谷

といふ本小出たり 李亮といふの詩も **命駕** 外西山 寓目 眺原 嘯と

作さるも 〇七月と入日と云ふ又靈辰 此事なり といふ人万物の灵也

といふよとて 靈辰と名つく 〇三 七圖會小の曆と違ひ 今日と往

亡日と守出行を忌まふれも 頼朝 出陣と諸人往亡日あるはりて

といひさうぞとれぬてうと亡ふと といふうて 軍利ありしとかり

天氣 風雨わき **白馬節** 災ひあり

會 七日白馬と見れば 氣と 拂ふといふ 禁中して 七日小

馬北足引々之馬の陽の歎青之春の色あり 故に春の始に御覽ある

あり白き月の青さあて見ゆり物之
夫ゆゑに馬節會といふふや

詞百本の庭下りえ。並。よ。ひの
づら。り。を。を。る。松は糸をぞ井

は。美。引。つ。つ。孫。美。奈。鴨。排。白。る。と
引く夜のそらも月元。那。重。勝

御弓は奏 七日の節會。兵部
省より奉る天竺の

多羅葉の其長と七尺五寸。あはは
御弓もそれなむ。どりて七尺五寸

る。ゆ。へ。を。御。さ。し。と。申。さ。さ。り
○一説御執の奏と心をもつ

御修法 紫宸殿まで勤る七日
より十四日迄東寺御

室より修行古昔に此所。小真言院
有て修と今に寺を多る。暫く南

殿を行ひ 七日正月 本朝。今日
なまふ。と五節乃

ひ。ひ。ひ。正月の少陽の月。七。少陽の
教。今日。少陽の月。風。少陽日故

上の朝庭より下方民より。宴會
と。と。若菜のあつ物と喰て。子の日

の遺風とる。七草若菜の。と。詩
哥連俳。四十二日若菜の外。あ。う

△七州。あ。と。つ。て。昨。晚。若。菜。を。板。小。の
て。日本。の。鳥。と。唐。主。の。鳥。と。渡。ら。ぬ。死

小七草。を。つ。た。し。し。て。嘸。と。鬼。車。と。さ。鳥
鳥。は。實。公。家。の。ひ。へ。へ。は。一。等。し。と。ひ。鳥。と。さ。し
は。あ。の。心。鬼。車。鳥。の。夏。ハ。事。文。類。聚。か。と。い。う

△福。若。菜。の。か。ひ。△薺。の。の。ひ。△七。州。の。ひ
△△を。摘。△薺。高。摘。△若。菜。摘。右。等

ある。類。つ。ひ。と。の。正月七日より
あ。ぐ。杯。の。か。い。與。の。草。木。の。部。を。委。

詩 人日詞 盧全

春度春帰無恨春 幾年もくモ
朝方始覚成人 朔日ヨリハ。六。六

人日 従。今。克。己。應。猶。及。今。日。ヨ。リ。人
ト。ス。願。與。梅。花。俱。自。新。心。ヲ。新。メ。ト。ゾ

願。與。梅。花。俱。自。新。心。ヲ。新。メ。ト。ゾ
○人日 金縷人 金糸で
故事 以テ人

願。與。梅。花。俱。自。新。心。ヲ。新。メ。ト。ゾ

形ヲ作りテ是新年舊キヲ改ノ新キニ從フノ意ニコレヨリテ

人日トストテタヒトヲトシテ元日ヨリ歳時記ニ出 貼入於帳 六日ニテ

ハ六畜ノ日ナレトモ今日ニ至テハ始メテ人ノ日トナルユハ帳ニ人形ヲ

画テ貼ルナリ元日ニ雞ヲ除病画テ門戸ニ貼ト同意也新キ

布の囊小赤小豆を盛めて井の中置置きて三日め小取出し男ハ

七粒女ハ十四粒ク吞ハ京加茂の今年中無病なり

京 嵯峨燔堂 念佛始行大和 神事務

八 今日と穀日と云 天気 今日 遠き出行をいむ 雨ふ

きハ十五日も雨あり〇月雲小寒りるハ春雨多し〇夜參星月の

西小あまハ洪水とまる 御齊會 〇今雨あり水田ハは

太極殿もて今日より十四日迄最勝王経と講ぎりて朝家と祈り奉

申し之太極殿今ハけはハ紫宸殿ニて行ぎふと云 年中行事合和をの

法の道のへハ社君ハ子代を行ハの

ハ月の世の春 真言院御修 此にりハ為家

法 今日より七日の間行ハる今年金剛界ハれハ明年胎藏界ハるハ

後七日の御修 大元帥の法 治部省ハて七日

女叙位 女の位 此と行ハるハ 階と叙

事ハるハ 叙位ハ位ハ定ハるハ 讀人不知

春ハあハあハまハらハるハのハもハそ

女王賜祿 参議等の官入 衆 明門の内帷の座

て女王小祿を賜ふ公事の時女王
祿の女は字とよめと王祿と計ふ

京 空也堂鉢 撰津 篋の面弁
叩出初 天富八日

昨七日より 薬師 月毎
衆詣多し 八日と十二

日と縁日とく諸方
しも衆詣あはし

日九 今日天氣 晴まぬ梅
吉書奏 きうまのきう 九日又い吉日
と多くて行

る大臣衆と諸国の守釣と給ふ
て不勸の舎を開くべき由と奏す

る之俗ふいふく 撰津 西宮民家今日
びきき是き 居籠とて

日十 天氣 月暈あれい春中早
併暈早くきわい早せ

の午の三刻風とほくさ
る風さけま雨あふ 帳釘

帳書 今日明日とくさくして商
帳祝 賣人の家よへて年

中け賣物買物を記し置く帳
面とどらりさう 非 帳とらや若中

と心ハ あひす 夷祭 千日夷と 非 世も
お袋 西宮今宮代や名不

小刺も春はを 龜音 狂 も人の勢み
少やま ん 戒 ありの 巻くさ

ゆ 常陸 常陸帯と神事 常陸
貞柳 の国

鹿島明神の祭に日女の懸想人あ
りさう時その男の文とり紙布の

帯かりきあつて神前小置み其
内く あ 帯と見て女のうけ

帯の う 帯とす つ 其 さ び
け の 男と親 く 事 さ じ

無名抄小見へく 非 く 常
ありぬ風も神 お 後 東怒

十二 不成 鬼宿大吉とさる事正月の
日就日 始吉の字と十一 る 今日と吉

御具足鏡 具足鏡問 元日小具
足ふ そ 雑

御具足鏡 具足鏡問 元日小具
足ふ そ 雑

煮とあして喰ふこゝ江戸御殿中井
小諸大名の屋形も同断かりその

かゝり北日へ大猷院殿君の御月忌
るゆへ兼應壬辰の年より今日

かろふと(俳) 緋威の海
をもちろ七林のま 木冠

除目 今日より十三日まで三ヶ日行
りてアガタとい郡国と申

あり諸国の受領を召て官禄と玉
るまわく申せ執筆の大臣参り

て御殿の廣庇ふて行すなり(前年
中行事哥合やとふるるをささむるわ

かこりゆづるいあへふあこそぞ
ゆき新中納言(俳) かけて對の

事始 今日何事いりす
仕初る帳の表書

京 柳原の榊小神酒と供す
今日と廿一日毎月なう

二十 今日と花朝 天氣 今日日小暈あ
の節といふ 春(月)中雨降

登より晴きハ月中雨降〇月小ぢあ
れハ飛虫の類多く死と〇今日

一日ひよりあれハ百菓より実のる
今日と十六日と雨ふまば年中雨多

解齊ハ御粥 日の御座の大床
かて臺盤一脚と

立て供す御粥赤さかりけ小和
布の御汁物をそとより三口食ふて

御箸と 藥師 毎月今日と會
日と参詣多し

三十 天氣 今日快晴なれば
毎月十日和は 大坂 弓。御

結鎮も云弓矢の大礼へ
神居自居三韓退治の時より始
まる天下太平の御祈禱なり

南都 奥に
心経會

四十 今日を俗よりんうと又
削花

柳の枝とけつろけて門戸かさす
柳ハ陽木小で祝ひとまどる

踏歌 殿上地下の輩
然るべき御殿

どめぐりて催馬楽とて舞ひ
かざる事なり天元六年より始
りて唐の世小長安母踏歌
せしめ事潜確類書小出たり
我朝よ持統帝の時漢人來朝
して踏哥と奏と此時萬春樂と
舞小今の万歳とて余風とて
これを男踏哥といふ十四日の夜より
女踏哥ハ十六日の夜よりあり
そのとよめありといひ又踏哥
の節會ともいひて京中男
女は声なきはりて能くさるる者
と名ははれて年始の祝詞とて
りて舞を舞せざるは侍に
ゆへに或時の和哥とていひ又詩
とていふありもあり源氏物語
小竹川をいふふと出たり高市
子小綿の花を作る是をさるるの
ことといふ又ありて小朝士の文
とよくするありて踏哥声調

をさるるめりて事文類聚亦有
あがしをさる十五日の夜と云云

年中行事哥合 貞世

そのまの声さるるをみか
るはのまはりて月夜み

非とひをねを神代は踏歌宴其角

頭排綿 綿の作は花を冠の額
ふつけをとりあり

踏歌詞 唐張説

花萼樓前雨露新長安城裏太
平人今夜イロクノツクリモノアリ都

龍御火掛千燈艶雞踏蓮花萬

樹春梅蓮ナトノ造リ花ノ燈籠
カザリニ竜ヤ雞ナドヲ見事

二造ルニキハシキ見物ナルゾ

御齊會内論議 南殿にて
御齊會

の結願を行ひ問者講師ふと
御前にて論議とれば内論議と

申す 十四日羊越 繩引（細引）

ゆみ大つなと引合ふて勝負あつひ
て其年の吉凶を占事なり

土龍打（ちりゅううち） 京（北野）
神前

午王が持結願正月朔日
行る今日至行法終 江戸（谷中）

感應寺 大坂△生身供（天王寺）
の富突 今日迄

十五日 俗 天氣 今日雨ふまは
八月十五日か

又雨ふる○天晴まは 測年之
菓大ふ熟じるなり

豊凶 今日夕月れ中する時一丈
の竿をさそく月の影を

測る七尺ふれば大豊年六尺も豊
年九尺一丈水とまると三尺四尺五

尺の豊 養生 今日夫婦の交
わりと禁ざると

命短し 三毬打（左義） 正月
長（小打）

さる毬打玉と真言院より神泉苑へ
出とやまよさる（草あり） 毬打玉の三角

みて天地人な表りやさよるハ陽と
まると。今の世民間より正月のハ

ざり松竹ふめあらの類とやく是
とぞんじふ之○唐の元日ハ竹とやく

竹のやろ音あて陰氣とくハ妖邪の
いどのぞくと（本朝これより）

△爆竹（とと） 竹とやくあり
△古書上る書初（まが） 今日やくあり

△ひー花びら（わ） 竹とやくあり
能三徳おの唐土のなれ毛（さ） 貞徳

かやれハ世と一回ふるとりハ十磨
狂お教ふのやりとれハたふると

ゆえれぞんと賑ひふたり貞柳
詩 爆竹詞（クナクハ竹ヲホコラ） 黎淳

自憐結束小身材 一點芳心未
三

肯灰アハレナル材木ナレドモ心ニ 時

節到来寒焰 發萬人頭上一聲

雷時来リテ火ニカ、リテ松竹ノ鳴ル音 雷ノ如ク諸人ノ頭ニヒツク

御薪百官悉ク薪ヲ奉リて宮内省亦おさせり 奉りて宮

民のけりも賑ひみたり 家尹

赤小豆粥祝紅調粥ニ粥棹といふ小豆

清水納言枕草紙十五日ハワカ

粥粥杖とも云○昔ハ禁中中ても

きたむれ桃双輪此杖

平岡の御粥河内国恩知平岡の神前ニ粥を煮

田畠の吉山今日とハ夜を

占粥白共云 上元元宵元夜とも

七月十五日と中元と十月十五日と下元と凡そ唐の今夕燈籠と

多々とり甚めたり事之本朝中元の夜は是と花燈多と云

詩 上元詞

大樹銀花合星橋鐵鎖開燈ノ丸サリ善盡シ美盡シテ種

暗塵隨馬去明月逐人來見物

人往來々々賑ハシ 遊妓皆穠李キ夜ニコワアレトナリ

行歌盡落梅タツサヘアリク 妓女ノ

王漏莫相催 金吾ハ御門ヲ守ル官

上元故事唐土ハ今夜

ナド、云テ燈ヲ点シ賑ハシ

キ、本朝中元ノ夜、如シ

百枝燈

唐ノ世ニ韓国夫人百枝燈樹ヲ燃セシ故事之天竺遺事ニ見ル

唐ノ世ニハ今夜宮女ノ遊行ヲ許ス街衢ノ

燈火白昼ノ如シ士女一人モ夜行セスト云フナク車馬路ニ塞カルト

靈異小説 傳相 今日唐ノ世ニハ二出タリ 貴戚黄柑ヲ

贈ルコトアリコレヲ 虹橋ヲ架 怪傳柑ト云フト

録ニ云ク唐ノ開元ノヨロ正月十五日帝葉仙師ニ宣ク四海ノ内何

レノ所カ極メテ麗シカラント仙師答ヘテ廣陵ニ踰ルコトアラジト帝ニ

夕何シノ術有テコレヲ見シヤトアリシ時俄ニ殿前ニ虹ノ橋アル

ヤガテ大真并ニ高力士黄香綽樂官数人ヲ從ヘ歩シテ橋ヲワ

タリテ行幸アリ俄頃シテ廣陵ニ至リ玉フトアリ

花燈 唐ニハ今夕燈籠ヲ多クトモレ舍利ヲ拜ス也

○至道元年燈々太宗御樓是ヲ花燈也 燃火ニ舍利ハコトハ花の杜吾

京 加茂左義長並ニ神事○差我釈迦開帳ノ八幡厄神祭 十五日追

伊勢 △獅子頭神事 山田度會郡ニ獅子頭ニ神体トシ十四日十七日追祭

駿河 △御穂祭 三保大明神是ニ三穂津姫命ニ祭ル十四日ヨリ十六日迄ナリ

養生 今日大酒といハキハ又夫婦の交すハハ

天氣 今日西南の風と入門風と豊年のあつて

東南の風も西北の風も早とつとささる暗天も早も

女踏歌 十四日男踏歌の如く京中ハ男女

声よく哥とてふを免されて年始の祝詞をつらうあつて和

哥さうさひ詩をうさひ 走
免ぬたけりも有しとる

百病 既小本篇博物笥
入 以見へり ○西京雜

記小云く執金吾の宮中の者の
夜行を禁ずる官之今日勅して
前後各一日間三日の禁とゆへり
これを赦波といふとさきを見る

時ハ唐土ハも此事有しとる
非 菽公それいふをたれんか 尊
子 婦入マ見ぬいれと父のさ 全
狂 菽公箋は月るれやうれと

ぞら一ニとめ 京 永觀堂大般
そめて物大唐 若轉讀 ○

頼朝卿の世ハ始る ○加茂神事
○北山石不動參 ○千本焔魔堂

參 ○大原野春日の宮 ○
差 焔魔堂六斎念佛 江戸

焔 參 ○増上寺山門開
釈迦十六羅漢を拜せし 大

坂 天王寺射場の弓とめ ○同
所金堂大般若轉讀 ○住吉

甘菜の御供神 明神々詠
殿ハ御精進供あり 外々ハ與御供あり

いよの國うまのたけのこも 十六日
口ははるれせととふと

櫻 伊豫の国道後の左の方山
越村といふ所の了恩寺山ハ有

山ハ登ると左の方林の中ハ有
て毎年正月十六日ハ花咲くゆへハ
名つくじり此山ハ花と愛する翁
あり実とえのさうとありと老後ハ

及んで春咲く花も心せよ吾よ
ハ八旬ハあまれば此春花咲頃ハ
逢ひがごとくかこわれハ花とら
り咲く時 是正月十六日あり
それよりして年毎ハ正月
十六日ハ花さくとあり

七十日 天氣 今日と秋收の日と
晴天をれハ秋ハ至て五穀

豊作也大雨あり秋洪水あり
曇る秋作不宜昼を晴むる害也

京 禁裡伶人の舞御覽并に
鶴庵丁大隅高橋隔年小

大坂 天王寺東照宮御
法楽○同所金堂

本尊秘法○江戸 上野御参詣は
御監宮御弓 御装束にて

八 今日と落 養生 今日怒り
日 灯日とよ 賭 事といふ

弓 天子弓場殿にて弓を磨
あまらる其負はる方ふり罰

酒を賜ひ勝る方ふり舞樂を
奏す大く近衛の官領るれ事

そく大将射手小饗を賜ふ
ととかりあまらるる方ふり

年申行事奇合 よみ人あは
棒弓射子の羽根引はまき

かたりあまらるる方ふり
柔木春を棒ねまき引はまき

非 多し射るはらや二人張友静
けねの心かすのふとすり頭仲

京 禁裡の左義長○山崎室寺
鬼○壬生六社大明神祭○

大坂 天王寺太子堂踏哥節會
○新清水寺観音供

十 不成 八幡厄神祭 今日まで
九 就日 参詣難民将束札守りと

天王そんが情を得ぬは汝の子孫永
災難をまぬかす言ひよぬへるゆへ

△吉田社清祓 厄神とく人事をり神
樂園二十六本の御をい

と立神祇官夜支の刻小修行せし

法然上人御忌 今日廿五日迄
四ヶの本寺に

排 人の世を乃どろろ月ほは林其角
種産むは法を華双山移竹

九 秋收日 天気 晴天ふり百菓
日 熟す

女鏡臺祝 昔小祝ふ事廿日初
と字音同トキ故世祝を

習なまるる 女人の鏡かがみ臺たい小供こくわい餅もちと今日けふいそぎ喰くふ支し身み 今日

骨ほね正月しんげつといふ京大坂きょうだいさか杯はちも今日
塩魚しほいしの骨ほねは大豆酒とうじゆのかき煮に食くふ

七日團子なんご 今日けふだんご喰くふゆへ名
づく唐土からくち江東かうとうといふ取

今日けふ紅べにの糸いとはく奠ひたひた餅もちをつるぎ
屋根やねの上うへの小こねきとこれと天あま穿せんと

名はくろるり。拾遺記しゆいぎに見えこ
り七日にちふだんご喰くふも是

江戶江戸 諸大名將衣束しよだいめいしやう
小て上野かみじの茶詣ちやき

下した交まじり 嚴島祭えんじままつり 安藝の國あきのくにの市杵嶋しきじまの神かみ
云地景くもぢけいの美うつくさ故名こなつこ

北きた一いち日にち 天氣てんき 風雨かぜあめと主しゆる日ひ之の風かぜあけ日ひ
雨あめわう若晴わがはらは異い日にち風雨かぜあめ之の

内宴ないえん 仁壽殿にじゆてんをい行いる文人ぶんじん小
題だいを賜たまひ詩うたと作つくる御ご

前まへを講かうぜらるると之を年とし中なかつ行事こうじ哥か合あひ
子こ子こ振ふ律りつの泉いづみれそのゆゑや

花はなをみわたの 京きやう 伊勢祭いせまつり主しゆ柳原やなぎはら
のの神かみ小御酒こみづと

供たまへらるる○本國ほんこく 江戸江戸 高輪たかづる毘沙門びさもん堂どう富突ふとつ
寺てら日朗法會にちらうぼうかい

二ふた日にち 京きやう 太泰聖德堂たいたいせいとくどう法事ぼうじ○大原野おほはらの
春日社祭かすかひしゃまつり能のり西園さいえん灰形祭はいがたまつり

大坂おおいさか 天王寺てんわうじ太子堂たいしどう 三さん日にち 京きやう
月次げつじの法事ぼうじ 樂がく音ね 日にち 京きやう

東山善正寺とうざんぜんしやうじ 四よ日にち 京きやう 川か鳥とり祭まつりのの尾び
款くわん迎むかひの開帳かいちやう 日にち 京きやう 愛宕あいとう茶ちや次じ

江戸江戸 増上寺ぞうじやうじ上坐じやうざ法問ぼうもん 諸大名しよだいめい
茶ちや詣き○愛宕山あいとうさん茶ちや次じ

五ご日にち 養生じやうじやう 今日けふ日にち房ぼう 天氣てんき 月つき小こ暈うん有あ
事ことと日にち房ぼう 樹じゆ小こ虫むし多おほ

京きやう 北野きたの法衆ぼうしゆ 御忌ごき 法然上人ほつぜんじやうじん
連れん哥か毎月まいげつ 御忌ごき日にち知恩院ちおんいん光ひかり

明寺めいじ里谷智因寺りやちいんじ百ひやく返へん 淨花寺じやうけしや四しヶがの本寺ほんじは於おて
法事ぼうじあり十九日じゅうくじゅうにちより令しん
日にちまでよてけりらん 初はつ天神てんじん

京きやう 北野きたの江え湯ゆ嶋じま 六む日にち 京きやう 西さい田でん下げ津つ
大坂おおいさか天満てんまん別べつ館かん多おほ 林はやし神かみ事こと能あた

廿不成 ○泉涌寺舎利會
廿七 齋日 京 ○西の留牛ヶ瀬祭

廿八 江戸 目黒不動
動叅 大坂 北野石不動叅

初不動 今日縁日ゆへ諸國不動叅詣多し

晦日 天氣 今日風雨あれ 清水本寺ハ米價貴し 京の連歌

白髪と除く 今日井華水と少く ぐろく 香ハ鬢髪白くある事すし

月令 此部ハ日の定まりたる正月 一ヶ月の事とのん。初春の 一ヶ月元日次み出と

外記政始 尤吉日とあるふ 外記ハ恒例臨時

の政事と執行ふ官なるゆへ正月の さまの當年の政と行ふ始る義なり

店卸 懸祝しく同類(非)一奉 のんささやや柳あじ 風琴

傀儡師 傀儡ハつとよし 驛舎の留女の遊女

とろひたる松とつとよし人形とま りて其々つの留女の身なりと

うせしゆへ傀儡師といふてく るなり又でこもも 西の宮淡路も 多くある

詞をこまへり 山摘つとよし 志むる所 (非)箱ふけて表せぬ猶や傀儡師 汶上

夷廻 傀儡師の類して初春ハ夷 の姿とまへり目出度とを奉

初芝居 昔ハ芝の上にて見物し たる故とまへり名づく

一説ハ右店卸 傀儡師初芝居乃 類歳且小次ぐりのつり可考と

三節 正月元日 七日 十五日 右と三節とあり

歳旦開 宗匠家ハ正月吉日 と多しと門人たり

よみきくろ歳旦の句をあらわ 席とありて句の次第と定む

正五九月説 本邦專此三月 慶賀の事とほ

或ハ親族相識宴會と云々唐
小てハ此三月官小登らむ萬の
事にも用ひと云々五雜組小見
えと云々清波雜誌小曰く佛
法小此三月と清素月と
名附て殺生と云々かま

正月衣服 上つくるふりあ衣
服あかごうて定む

櫻衣 表あ白く 裏あ色
李三月

上つくるふり正月右のいろとや
たゆみ正月の氣小應する色と

當月綿入を着ると以て正身
袴ハ柳色と云々是元素袍の製

女衣服 上あ着地黒あ向あ着
地紅下あ着あ白

むくはうあ浅黄あの小袖と着か
きて間あ着上あ着皆ありあ裏あ不

きると初春の莊あいあるあじあら
うけあはあ松竹の繪と縫あよあとあべあ

時令 此部ハ初春の時候
小かごう事と出と

初春 春立日より三五日のあ
いあるあ早春と同心あ

①梅や咲花のおとらん子代あの着
②非あ言あやあきあ乃あるあぐあくあ晋あ子

初あ言あやあ乃あるあぐあくあ晋あ子
兼久百首 初春日 忠房

かあ衣あまあくあらあらあむあとあああらあむあ
日のあうあらあくあとあああらあむあ

万葉詠鳥
ああるあびあきあまあまあらあむあじあ我門の
柳あのあうあらあらあむあらあむあ

建保百首 家隆

君もあけあまあのあああぬあみありあけあ
ふあ松あぐあえあんあ母あくあ歌あ志あくあああ

續古今 初春霞 為家
深あみありあ衣あ履あのあ衣あ乃あまあらあ

まあこあふあらあらあむあけあらあむあらあん
草庵 初春鶯 頓阿

り人神たつつと縁つり人の心
のころる。佐穂穂燈燈のこのこら
おもて護ぬらふ春の本の終り
都るこの春。九重の花の都の
初云。垣かのまりえ初の。雪
中にのあるの久くの天の若さ天
の身。雲井。よの奈のの路のり
らとも初也。

狂 山依のおひびどめと少く附い
門もと上にけまの山云 信徳

○初春早春の題ふ立春の哥よ
みさるらるかははるも立春の

題ふ初春の哥い詠なる守。立春
といい春の節一日又かさるこ

早春さき 萬葉万葉
初あるらる見る柳

嘗のとおてかくくまいるれ
拾玉 雪中早春 慈鎮

附しあれがくままの影ここそ
雪のうみをたふ引ふれ

艸庵 早春氷 頓阿

山川のあはる波をくくま
まくまるりあるはるる

夫木 曉神祇 家隆

祇山のひ月はあらさえて
とうれらる喜びとひとくん

同 名所早春 如願

相坂やく見もあへねた奈に
まくあるるぬのくそく

宝治哥合 早春霞 信実

初あるも喜まぬある玉の
こはららるのけれをとれ

詞 庭ふらし。淺みとり。雪をけ
きく。雪げ不おる。淡雪ぞくる。

風さる。春来ても春のあるまに
流もたまく

能 雪のゆき出たり柳は其角
狂 あらまの春をくくまるまる
歩の程致口いけそあ漱口

物外山川近 風光新柳報

春初景色新 宴賞百花催

詩 早春作 暢諸

獻歲春猶淺 日數程アラス 園林

未盡開 百花ヲ催レドモ 雪和

新雨落風帶舊寒來 雪ハ雨ニト

風ハ未ダ余寒 吟鳥聞歸雁看梅

識早梅 飯雁早梅ニテ春 生涯知

幾日更被二年催 ル世ニ年ノ

老衰ヲモヨフスナリ

餘寒 春小ありてさむらふ云

非 嘗のほもつさほふそさか 鳥爰

沙汰あり月のちある餘寒

宝治百首 入道太政大臣

貞應百首 為家

美来つひは辺の氷を融かして

柏玉 餘寒雪 後柏原院

あめがうらふさうとらねをねりて

きねののまは今初の洗雪

玉吟 溪餘寒 家隆

まどとをくまふれぬる風乃

ひすぶかりの雨もささげを

千載 餘寒月 為尹

猶さるるさむらふそさか

あめがうらふさうとらねをねりて

きねののまは今初の洗雪

玉吟 溪餘寒 家隆

まどとをくまふれぬる風乃

ひすぶかりの雨もささげを

正月時令餘寒
春寒柳暗催雨雪未知春
雪霽梅先發山河雖度臘
石門斜日到林丘何報春
難所路ヲシギテ日カタク
疲馬山中愁日晚
孤舟江上畏春寒
春風寒

詩餘寒五字對句

同上

春寒柳暗催雨雪未知春
雪霽梅先發山河雖度臘
石門斜日到林丘何報春
難所路ヲシギテ日カタク
疲馬山中愁日晚
孤舟江上畏春寒
春風寒

詩餘寒七字對句

詩礎

澗道餘寒歷冰雪
門不開
石門斜日到林丘
何報春
難所路ヲシギテ日カタク
疲馬山中愁日晚
孤舟江上畏春寒
春風寒

詩餘寒詞

張起

畫閣餘寒在新年
舊
燕歸
寒
ツヨク春ノケレキナ
ケレドモ二月ノナカバニ至レバ燕
ノ飛ビキタルコロ一ナレリ

梅花猶帶雪未得試春

衣
春半ニ至レトモ雪イマタ
消ヘズ冬ノカサ子ギノマ、

ニテイマダ春ノ衣
服ヲキテモ見ヌ也

狀餘寒之文
濃文尺牘ニ

倍
春
寒

如
何

起
居

如
何

衆作試候山く之
嶺

雪未不融一の電音

積雪 須二弄翫
久遠糸仕ひく保

麗藻ノ

吟々々々々々々々

新賦アラハ 請フ示ニ

夜未存い

不倭

尺牘 檄華と書替と記と

頃日 多日 倍春寒 歴春猶寒 新賦 數日 未知幾 花邊賞

起居 無事 無恙否 千嶺

積雪 山嶺白雪 密前雪景 弄翫 中 雪漏霞外 殘雪皎々

想像 麗藻新賦 新詩龍劍 中 眷々

請示 不倭 中 野生 中 小

狀 餘寒之文返事 尺牘之漢文

如く今春未始和氣 若諭雨雪未散

山林閑寂詩人感興 遠年々々々々々々

存望中 有詩料 而 恥無著迹 他日

得暖氣の正為のう入の 御問馬

得暖氣の正為のう入の 御問馬

尺書督並ニ 若論 蒙無命 教示 義告

雨雪未散 康雲未晴 水雪 幽林

遂深山 閑寂 閑事 詩人 古人 古調

感興 吟趣 存筆 直若見 詩料 興 函情

無着述 他日 異日 上喻日 向來 逐節

得暖 假睡 往問 叩謝 問尋 往訪

○年内こそ立春の節より
ハ餘寒とつべし正月元日と
ぎいとも立春の節より前より
餘寒とつべし今春
寒氣つとつべし
○二月たりともいゆれば餘寒と
つべし。非識ハ餘寒とつべし正
月の季より哥ハ春より

春雪 △あつ雪つぐまも春ふ

△残る雪 春雪と同じ事あれども哥
にさきの雪を多くしめり

拾遺 柿本人麿

梅のむねもさきをひさうこの

あまなる雪のなべてあまは

散木 山家春雪 俊頼

ふさつりつる雪のつらりと

ふさつりつる雪のつらりと

万葉

今さうに雪やちやもくたつびの

ゆりまけりしやうはここのを

建保百首 春雪 定家

ほろの今も少りくくたを山

おのまこころやまを紙かへさ

新古今 二月雪落衣 康資母

梅り次風もこえてや吹つらん

そまらる雪の神にさうらう

新拾遺 野春雪 覚譽

おのまこころやまを紙かへさ

さやかぬまのあつ雪をぬふ

詞 春の雪をさうらう 万葉

正月一時令春雪 正七十一二

のよりなるくまのて 冬はくまのて 子月 冬はくまのて 小松のて

ふき草 冬はくまのて 下りえき草のて

連 冬はくまのて 入る流るの春風 冬はくまのて

非 冬はくまのて 毛とくくして春の雪 冬はくまのて 支考

狂 冬はくまのて まくまのて 冬はくまのて 春の雪 冬はくまのて

春雪盛山浅 冬はくまのて 海暗雲無葉 冬はくまのて

夕風輕地寒 冬はくまのて 山春雪有花 冬はくまのて

官室雪花齊 冬はくまのて 紫閣春雪闌 冬はくまのて

関河春色到青門 冬はくまのて 雪輕 冬はくまのて

前庭花少春空度 冬はくまのて 帶雪妍 冬はくまのて

後嶺雪深月更寒 冬はくまのて 雪不寒 冬はくまのて

詩 殘雪七字對句 詩 礎

湖添春色消殘雪 冬はくまのて 映新陽 冬はくまのて

江送潮頭涌漫波 冬はくまのて 又夕時 冬はくまのて

遲日未餘消野雪 冬はくまのて 對南樓 冬はくまのて

晴花猶自犯江寒 冬はくまのて 雪中春 冬はくまのて

詩 韓舍人書齊殘雪 冬はくまのて 戎昱 冬はくまのて

風捲黃雲暮雪晴 冬はくまのて 江烟洗盡柳 冬はくまのて

條輕 冬はくまのて 暮風吹 冬はくまのて 蒼前 冬はくまのて

數片無人拂 冬はくまのて 又得書窗一夜 冬はくまのて

明簷 冬はくまのて 殘雪 冬はくまのて 入 冬はくまのて 却 冬はくまのて 昏 冬はくまのて

雪解 冬はくまのて 雪解 冬はくまのて 雪解 冬はくまのて 雪解 冬はくまのて

新古今

前參議教長

ワカ梅神をさるる春日の
さふ火けのへの雪乃むく消

草菴本志に花と見よと云はる
らん夜に消行をたのむ頃阿

詞書る雪けけあ。雪消る雪の
こま。雪もくる。のころ雪

非名あや寺と破る谷も雪
狂い男乃て目ねりまふふ

とくも知る名女之那貞徳
詩雪解五字對句 同上

送寒餘雪盡 寒雪多秀水

迎歲早梅新 碧洲盡清流

湘潭雲盡暮山出 水乱流

巴蜀雪消春水来 山更春

雪類附 雪の山よりく雪
とらふ三月の比雪

乃あふ山の麓と通らば高根を
山下の様子と尋林合せ油断を

く通るへいさるれいつて峯高
根の雪解上よハ雪もあまとも山

の肌峯より解落る雪水あこ
ひ山の肌と雪とをを切てる

時ハ裾へるたぐり冬より積
たる雪るれハ磐石の如くより

それふうくを死と事多し雪
さるれくまハ瞬目の間ハ落る

北陸越後あふハ越前近江の
境ハ甚しつづくも雪国高山

の所めてハ心 春氷 春小つら
得て歩行へハ 氷りると云

又春風よめけ行く心もよあり
新古今 藤原秀能

夕月夜波さら木に波波江の
声れりるなるあはるあはる

詞 氷のくさくさ小川。為氷。ささく
水の白玉。おひける。春風。さかきのお

詩 春水七字對句 詩礎

引水忽驚氷滿澗 水重文

回田空見石和雲 引溪長

残氷 春のさうさけつくる氷
との御傘と云書ふの氷薄
氷冬とあり

氷解 建仁哥合 家隆

氷さくまの山風ふれやれし
宏招ととひつたさのあつた
詞 氷さぐる。わてとくは。さるの
ひま。わゆる。さる。空。春風。池。さ
初日けさる。初吹あさる。河あはさる。
風はさくは。ささる。さる。

非 氷さくまを破鏡や思ひ出
連 氷さくまを破鏡や思ひ出

鳥飛林覺曙 風兼殘雪起
魚躍水知春 河帶斷水流
詩 氷解七字對句 詩礎

詩 氷解五字對句 同上

三代樂回風入律 水初綠

四溟歌駐水成文 水知春

洛水春氷開 洛城春樹綠

花亂馬足 落花馬蹄

山笑 初春の山の姿とて
春の山の草木とて

詩 春山澹冶如笑

樹林毛緑ナル洛 朝音大道上落

陽ノ好景色 朝音大道上落

花亂馬足 落花馬蹄

山笑 初春の山の姿とて
春の山の草木とて

山の草木もまげ、流口のなると山の姿もまじに笑ふやうなる物と云々

日待月待 此三夜廿六夜毎月 此事とあす人も有

と別て此月祭つゝ公事の事を天地月日と祭つゝ公の都て天子

の僭踰の罪甚し天子の天地の

すつり 諸侯の社稷を祭り大夫の五祀を祭るとつり況士庶人と

敬に恐るゝ事、非礼の祭りをあす人の福あくして禍あり若木

邦の礼はあつゝい祭らへて歌こる人沐浴齋戒して朔日は朝日

とすい、十五日月と拜せり理におそて害さるるべし供物等用

ゆる事かゝる江中にて廿三日廿六日高輪鉄炮洲にて諸人群集

して月と拜を是俗人の是非の君子是ま不習

草木

正月草木類此次あつゝひと三月の季つゝあつゝ不苦なる

松の花

異名黄花 若翠 松

△みどり立右つゞきも春あり若

とつり以黄あつゝりのあり是と松の花とつゝ一説は松の花は百年

は一度さく月出度りのともつり

連雲は花を糸にさうぬ松乃を

能翠の岩の娘松をささよ思貫

狂常盤さう松のみどりも春さへ

今丁々の菓子れあらしひ 正継

哥草庵 頼阿

新拾 春松久緑 推家 新古 松有春色 太政大臣 松母そ子代乃をいひけれ

玉吟 松色添春

家隆

万代も終にのみらぬ松乃松

色ハあはのまほのまほうせて

同 春松契齋 後鳥羽院

友のし神跡乃山の松れう務

我をのまもまをかりり

新續古 庭松春久 左大臣

庭の面小まをたすの松みり

来し不まのまにそえらん

詩 採松葉

姚合

擬服松華無所學高陽道士

忽相教 松ノミトリヲ服食セント思ヘ

止ニ山中ニスム道士ニフト出アロ其

法ヲ思ヒヨラスニナビウケタリトナリ

今朝試上高枝採不覺傾翻仙

鶴巢 今朝先試ニナラフタルトホリ高キ

カケス窟ノ巢ノアル

アヒツクリカハセシトミ

如龍 松ノ木ノ皮ノ中ニ脂アリテ

狀龍ノ如シト抱朴子ニアリ

化石

六帖ニ云ク回紇ノ拔河

ニ古ハ康干ト云ノ川ア

リ松ヲ斫テ川ニ投入レテ三年ニ

ナレハ化レテ石トナル世ニ康干石ト云

本朝王物ノ

十八公 吳下固夢腹上

公石ヲ所リ 松生ト云テ松字ヲ

別レバ十八公ナレバ後十八年ニシテ

官位三公ニ登ラント云フ果シテ其

誦ノ封大夫 秦ノ始皇泰山ニ

如シ 封大夫 秦ノ始皇泰山ニ

テ暴雨ニ逢ヒ玉

ヒシニ松樹ノ下ニ雨ヲサケタマフ

因テ其松ヲ封シテ五大夫トス

靈岩寺 唐ノ玄奘西域ニ往

ナデ、曰ク吾西ニ去テ佛經ヲ求

本意ヲ達セバ汝西ノ方ニ長スヘシ

ト云フキニ去リケル後此松西ニ指ス一

年忽チ其枝東ニ向フ弟子等三

テ吾師歸リ来ルベシトテ

迎テ待ケル泉ノ玄井カニ

松品類

黒松雄松
常の松

赤松雌松も葉細柱
等小用て楠よりかき

朝鮮松本唐松の葉長
色を分て實と松子と

五葉の松葉をく
みトかり色あか

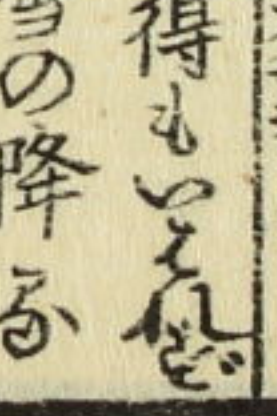
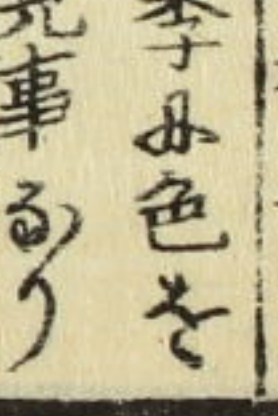
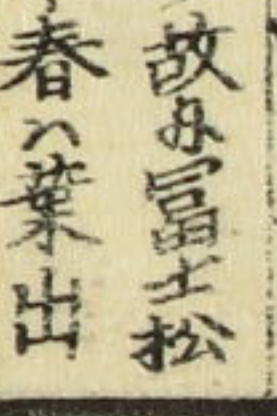
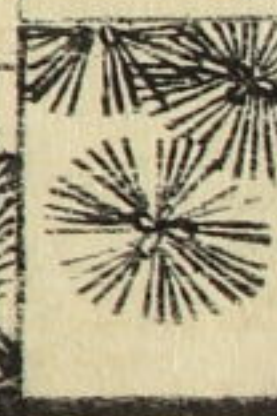
姫小松五葉似
似く葉をそ

つるもさきほめて各
別の葉多く花も用ゆ

駿州富士の辺多くあり故母富士松
とも葉を短く青く春の葉出
まて冬小落葉を此松四季小色を

夏の春の出葉は青く見事あり
夏小あがり秋黄小色つと得もいそ
冬にわたりて落葉して雪の降る

とれも枝ふたまる
事なくしてか



梅

昔の本朝花と称する
梅の中世の花と櫻と

梅の種類 白梅

江梅 野梅 大梅

行幸梅 花大くして

豊後梅 紅大 軒端梅 花中深赤

鶯宿梅 八重も一重もあり故事あり

飛梅 中難波梅 八重中

梅異名 水姿 氷肌 玉瑞 瓊枝 玉肌

士渴 逸民 雪魂 清容 木母 花魁

三凝紫 花儒者 好文木 故 繪 旨梅

香敷見草 此花 春告草 白州

運 句 後 智 雅 言 乃 梅 宗 祇

春風の定小梅 咲白ひる 紹 巴

浮 舟 花 白 梅 の 多 空

梅 痛 一 足 程 の あり 嵐 雪

梅 小 枝 の あり 元 政

梅 小 枝 の あり 其 角

梅 小 枝 の あり 全

梅 小 枝 の あり 全

本娘の梅ふちひるまののそ思貫
伊の控て水ひりく新乃梅移竹
三味線も小あもの流梅む来山

万葉 坂上郎女

妻これなすけさ 宿の梅は花
ひよりそつや春日くうさん

夫木 為相卿

どうてまの彩の梅はくれさあ
落くありさそ宿の一えと

万葉 家持

みそのあけりまの梅乃花むま
あめはひあうり香とありえ

家集 西行

梅がさうさそろふ吹とそえて
入るむ人より免よころ風

建保百首 定家

梅がや先うつろしん新
くまーまはの花乃かぐえ

新撰六帖 紅梅 信実

宿の梅はうひれをみ乃ある枝
祿をまけりぞのそそくふるん

金葉 尋梅 為道

誘りてしつぐのそそ梅の花
そとともいりけみやいあんと

夫木 春朝梅 家隆

待づるあさひの里乃梅あら
マそうい人も社白より舞

新勅 夜梅 前冥白

梅が香もあまげる月ふま
それとも見へむらひむころそ

夫木 夕梅 為兼

曉の風をまきびてそあ乃花
このゆよをふそゆけそあゆる

家集 山辺梅 仲正

よのつひつす本はらじまふの
梅乃白ひをたさりのふせん

家集 垣根梅 仲正

白の梅を燈をそつれをま
垣根乃梅のころるうりたり

夫木 家梅始聞 能因

去節かひもあるふいつしか
そそ花室の妻これあふ利

玉吟 曉梅

家隆

春のちのふぢる月夜乃梅花を
庭も中して宵明もそく

夫木 道梅 法印定軌

るのべ乃行墨山のう光れも
たらふはなかり春風をよく

白川 梅移水 頭輔

笑ひたりむのくそくもあつ
梅のうたゆく意乃中り水

家集 湖辺梅 定家

くみそふる志賀ははるあはれを
雪さそふふ那のまらへり

玉葉 月前梅 宗尊親王

梅が香い見りとの春あさりふて
若乃たれいふとむ月うけ

新續古 海辺梅 有親

延喜人のくくむ社も白くし
新波乃まき梅のうたう務

夫木 野外梅 光俊

志保入の子枕れ社梅をさ
ねて乃新帯れ社ふりあし

詞くれさあ。うすねこそあ。白妙

咲ちる。白ふ。穿く。や。ま。ひ。つ。不。え。

うつろふ。い。ろ。く。一。き。八。き。あ。ら。え。

き。の。梅。花。の。な。え。山。谷。園。地。ま。か。

け。の。梅。花。の。梅。軒。新。梅。の。梅。新。

の。梅。花。窓。の。梅。花。ま。ま。あ。ら。え。

南。は。花。垣。垣。梅。の。梅。真。本。つ。ふ。唱。

て。梅。花。羽。目。も。白。く。梅。花。葉。の。

ゆ。て。ふ。さ。梅。花。花。笠。柳。花。の。

さ。春。風。白。く。梅。花。白。く。梅。花。の。

さ。く。白。く。風。の。白。く。月。白。く。梅。花。の。

それ。も。さ。ら。ぬ。白。く。梅。花。の。梅。花。の。

る。新。日。白。く。梅。花。の。梅。花。の。

さ。く。多。ぬ。白。く。梅。花。の。梅。花。の。

咲。夜。文。の。白。く。梅。花。の。梅。花。の。

美。の。梅。花。白。く。梅。花。の。梅。花。の。

と。く。と。人。の。白。く。梅。花。の。梅。花。の。

ぬ。白。く。梅。花。の。梅。花。の。梅。花。の。

や。と。つ。ん。賤。の。白。く。梅。花。の。

梅。花。の。白。く。梅。花。の。梅。花。の。

梅。花。の。白。く。梅。花。の。梅。花。の。

冬春の梅 春の梅 梅の影 梅の香 梅の花 梅の葉 梅の枝 梅の果 梅の根 梅の皮 梅の骨 梅の髓 梅の精 梅の神 梅の魂 梅の魄 梅の魂 梅の魄 梅の魂 梅の魄

詩 梅ノ詞

張籍

自愛新梅好行尋一徑斜

梅ノ花ザカリヲシタヒ往來心ニカケテ

小路ヲ横斜ニニガリミチヲツヅクル

不教人掃石恐損落來風

ノ石ヲハラフテカスハ風ニ落花

レタル英ヲフミフンセンモノヲトナリ

詩 梅ノ詞 唐 彦謙

欲寫愁腸愧不才

思ヘトモ身不肖多情練漉已低

不サイナルラハツル

催云ヒムタキコトハカヅクアリテ已ニ詞

窮郊二月初離別

サビレクナツカ

シキトナリ

獨倚寒村聽野梅

ワヒトリ村上ニアル野梅ノ花ヲ

詠ノ香ヲカイデ君ヲ思フナリ

詩 梅花七字對句

詩礎

柳條呀色不忍見

梅花滿枝空斷腸

寒澗渡頭芳艸色

春梅嶺上鷓鴣聲

梅花五字對句

梅花交近野

草色向平地

梅故事

浮山の松間酒肆

服の美女と語小若き香人を襲ふ

酔臥して朝小起あぐり見まは梅樹

の下にありて酒肆 **梅曆** 山中 住居

て春の至るとも 以梅花の **梅曆** を見て春と多とある 又梅花曆と

詩話 蘇東坡の妹好んで詩を 作ると東坡は いふなり

山谷東坡の會して詩を作る時 **東坡** 和風 細柳澹月映梅花

と作る妹の云く未可 あらず 大母笑ふ山谷是を見て唱へて

詩 和風舞細柳澹月隱梅花 作 て 妹見て少く可 く

東坡山谷の兩人妹 ふいふ 汝の句い久し問 ふ 妹詩と即時 作

詩 和風扶細柳澹月失梅花と 作り て 二人も大 の 感 と

好文木 晋の哀帝書 て 四時 も 梅の花開 き

たりと つ 故 ふ 好文木 と 異名 を 梅譜 の 梅の花の儒者 と

節分草 花は白花 と 一茎 小 葉と出 し 立春の頃 と 節分草 と 俳諧節

分十二月の季 は 是 も 名 い 十二月 と 是 も 所 存

土筆 筆 つ 南方の諸 草 生 を 形 筆 乃 如 高 三

福壽州 元日 小 花 さ 元日 州 も

詞 春の明 の 美 水 今 州 佐保 の 風 斯

非 狂 か 狂 か 狂 か 狂 か 狂 か 狂 か

狂 狂 か 狂 か 狂 か 狂 か 狂 か 狂 か

福壽州 五字 對句 同上

淑氣煙相喜 瑞凝 三 秀 州

風光草尚榮 春 入 万 季 秋

詩福壽草七字對句

詩健

豈知玉殿生三秀

瑞色鮮

詎有銅池出五雲

動三辰

草芽半吐參差碧

知春歸

花蕊初開淺淡紅

嬌朝花

淺黃福壽草二重人々入薄



白黃之淺黃見後白



八重福壽草八重と心々も

五六重はく花の中も黄多

聖粟新粟

九月小種とす初
春生を出づ

若草

新草初草○初
春生を若草の惣名之

春日花のみひより春にいつあけて
たぢもるまはひわさる春約

詞 川のたきを。あまのたき。あまのたき。
あまのたき。川のたきを。あまのたき。

あまのたき。あまのたき。あまのたき。
あまのたき。あまのたき。あまのたき。

あまのたき。あまのたき。あまのたき。
あまのたき。あまのたき。あまのたき。

あまのたき。あまのたき。あまのたき。
あまのたき。あまのたき。あまのたき。

あまのたき。あまのたき。あまのたき。
あまのたき。あまのたき。あまのたき。

あまのたき。あまのたき。あまのたき。
あまのたき。あまのたき。あまのたき。

あまのたき。あまのたき。あまのたき。
あまのたき。あまのたき。あまのたき。

あまのたき。あまのたき。あまのたき。
あまのたき。あまのたき。あまのたき。

あまのたき。あまのたき。あまのたき。
あまのたき。あまのたき。あまのたき。

あまのたき。あまのたき。あまのたき。
あまのたき。あまのたき。あまのたき。

あまのたき。あまのたき。あまのたき。
あまのたき。あまのたき。あまのたき。

あまのたき。あまのたき。あまのたき。
あまのたき。あまのたき。あまのたき。

あまのたき。あまのたき。あまのたき。
あまのたき。あまのたき。あまのたき。

あまのたき。あまのたき。あまのたき。
あまのたき。あまのたき。あまのたき。

河梁馬首隨春草 春艸深

江路猿声愁暮天 百草生

曲江春草

鄭谷

花落江隄族暖烟 雨餘州色遠

相連 春雨ノアカリニ草 香輪莫輾

昔々破留與遊人一醉眠

青タル草ノ上ニ車ヲキレテ世草ヲヤ
フリソコナフコナカレ野遊ノ人々ニ
トメヲキアタヘントナリ

詩 同

唐羅鄴

芳草和煙暖更香 閑門要路

一時生 芳草ハヒロガリテ隱年ノ
點簡人間事 惟有春風不

世情 世間ニスノバ年々世話ノ
オホキニコノカンキニノ

界ニテハタタニ春風ノ
フクニオカスノ

下萌 冬かきころ草の春の出
發の氣かよつて下まき出

洞外面の庭。いざよひ日影を
春雨の残。春雨をどよせの詞

秀 新古今やうたもゆかりのさるる日
世とてすまじけ日のもうせうる

木芽立 △木の芽 木の芽りや
とつて下りて同じ心あり

非 馬の木の芽かき 女羅 木芽漬

非 能 雀のまのくま 鶉堀

藥 草木のきりやどり芽と生
どろとつて何脚つつけ

春の艸ふつるれ 春季といひ
秋の艸木ふつるれ 秋の季といひ

水菜 △水入菜ともいふ 京都近
邊より生らるる

薑 蔓青の苗を薑子 本草ハ苗と食い初夏心と食ふこと薑子と云

鶯菜 鶯菜 苗二

路臺 秋冬花 今この草と云 鶯菜の苗

田 田を田と云 田を田と云 田を田と云

田のまをりしと云ふと事入国かより

春もまが冬至か五十五日のまをり

生類 正月の部よりと云 正月の部よりと云 正月の部よりと云

猫の妻 猫 二月とある書也

前後より戀ひ初るかり春秋

二度さる春に牝牡を喚び秋に牝牡を喚んで乳て子と生をすく

きて寒氣とさるる月のゆへ秋子の

多く産らざりて孕て六十日して産じ生きて七日にて眼をひき

飯とく二月半とくは掛目百

目さる有て乳をさるめてもよく

そら鼻の尖つひ冷る夏至

の中日さるる暖かり鼠と食ふ

上旬より頭より下旬より尾より

食ふ猫の眼まで時刻とある哥

六ツ圖く五八玉子小四ツ七 株の裏

あり九ツハ針産は唐糸こ竹嶋猫

の二種あり 未だ言ふ事ある

といわくこの糸これ糸のけり死

かつをがあらよ仲正 詞か糸こ

治諸虫入耳 耳に

諸虫の入りしるは猫

取猫尿法 薑あつひと猫

① 龍も楕やげ 浅刺 大さき
ありさうり野蛙夕 浅刺 大さき

の如く出て色ハ赤々み不同
事入りてひかりして美多き

飯鮓 (異名) 鱒魚 正月の内盛
ハ出るりのきりたとの

肉のしるりのめりてゆへに名づく
① 飯鮓 やうたのきりたの内盛

春駒 春ハ諸州生出故駒
野とあれきり草と

喰ふ多り。諸家ハ養ひおさ
る馬も初春ハハハハハ

野と喰ひむ野のこゝ哥ハ春乃
野とあれゆくさぬをむ。① 非

識ハ春駒とハハハ初春の春
駒舞とハハハ春駒舞のこゝ

初春の部ハハハハ
春駒。春駒舞のあろろを
くんぐよみあハハハ

① 美治のさうたハハハハ宗阿

必用

此部ハ正月一ヶ月の天
氣の見テ其外必用の事との

破	暮六ツ	夜五ツ	夜四ツ
軍	丑の方	寅の方	卯の方
星	夜九ツ	夜八ツ	夜七ツ
向	辰の方	巳の方	午の方
方	朝六ツ	朝五ツ	朝四ツ
角	未の方	申の方	酉の方
	昼九ツ	昼八ツ	昼七ツ
	戌の方	亥の方	子の方

右の如く正月酉の刻ハ破軍の
斂鋒 丑の方ハ戌の刻ハ辰の方

寅の方ハ向ハ亥の刻ハ辰の方
小向ハ次第ハ順ハ一時宛てり

酉の時より操出と事ハ星ハ夜と
主さるゆへ暮六ツ時より出初る

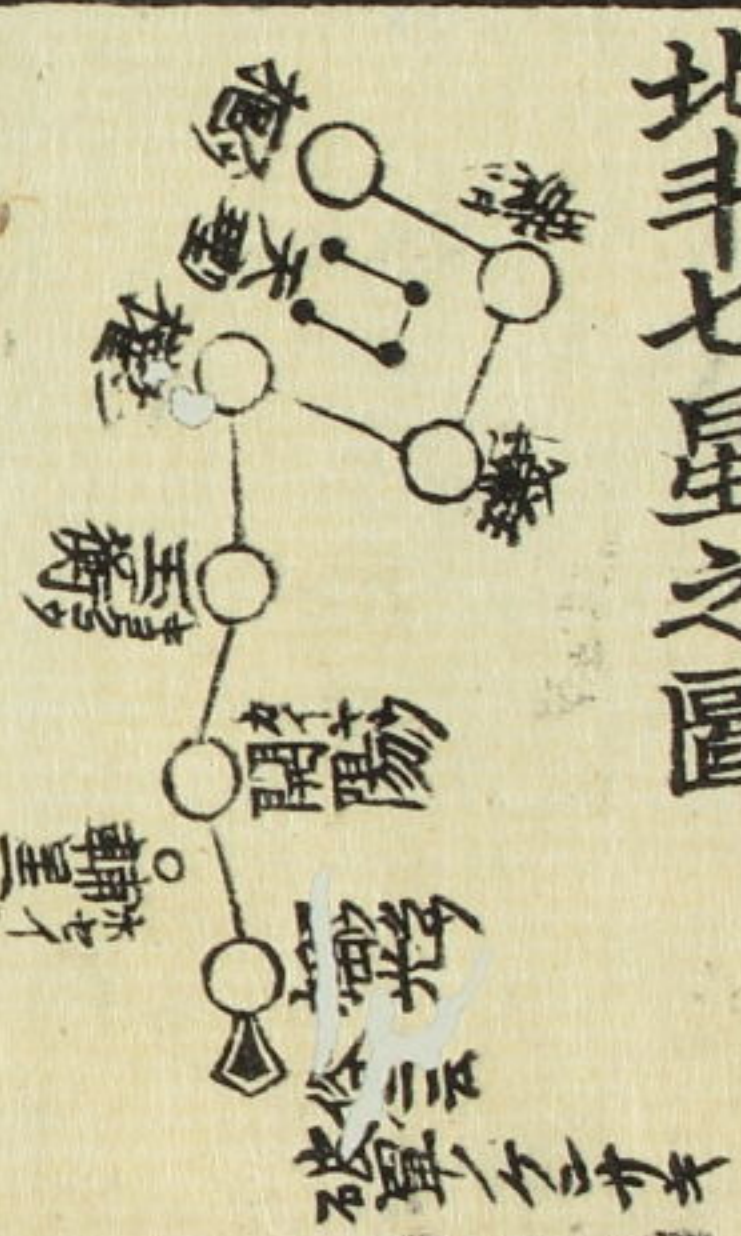
破軍のたんざれ向ハ方ハむい合
ありて争論又何事ハハハ

万事利ありは是天地の氣令の
應どる處多れハ能ハハハ

○三才圖會曰く昔唐虞の世ハ正
月酉の刻ハ破軍星寅の方ハ向

とつて夫より年数久しくつりて天の旋少宛替りて今こその口ふのづつおろく向ふかり日本に神代より正月を寅の月と定む北斗を見察すゆれば時刻を知るべし晴雨とも知るべしされがため

北斗七星之圖



第一の星と樞と云第二と璇と云第三と璣と云第四と權と云第五と關と云第六と樞と云第七と棓と云

天氣

北斗魁星の間黒くはや光りある雲傍小

あまの其夜雨あり○北斗の前
に黄なる雲氣あまの翌日風
ふくむはや光りある雲を其
夜大なる雨あり○黒く黄より白キ
はや光りありて長さ三丈余り
あまのく北斗とよみて散ざ
まば三日の内かるとす雨降りこ
まけまは人安和なる事あり
○り雲氣北斗とあまのあり
て蒼黒さ大なる雨あり黒ろ
さハ風多し黄白なる翌日大
に熱し○白氣ありて北斗杓
の間とあまのありて三日の内
か大風あり事とまは是正日に
あまのづつづの月ふても同一事
○今月稲びる有る人民不殃あり
○今月上旬小雨寅の日あまの夏雨
戊寅の日あまの秋雨壬寅の日あまの冬雨
天氣占候 今月上旬雨多くあま
の米價貴し中旬の

雨も米價亦貴し。○甲乙の日雨
ふさば春中雨多し。○丙丁の日雨ふ
さば夏雨多し。○庚辛は日雨ふれ
ば冬雨多し。○今月中令雨ふれ
秋小至。○日刻 万事刻限と定
むる。○當月の寅
の日寅の刻。○丑の日丑の刻。○子の
事とどる。○用也。○守利の事。

出行作事 正月は天道南の
まに出行きむ南の **樂事** と
方に向ふて吉なり。

おろし新と迎へく一夜のちん
明行空もろく替りやうふの
けく日光も美しくて父母の壽
親族相識互ふ賀し心も
き立勇し梅の色香諸木
勝る。○鶯の声の若やく小
薄く霞ある遠山のちん
何う長閑けり。

正月飲食 料理献立

禁櫻肉は月と六神は櫻。○葱は
物とくは魚と櫻は。○梨麩

まの食は。○鯛魚頭。○まの食
まの食。○も鯉魚の肝。○鰻の

まの食。○まの食。○まの食

まの食。○まの食。○まの食

まの食。○まの食。○まの食

まの食。○まの食。○まの食

まの食。○まの食。○まの食

まの食。○まの食。○まの食

まの食。○まの食。○まの食

あつび あつび あつび あつび

さんご さんご さんご さんご

汁 汁 汁 汁

煮物 煮物 煮物 煮物

包 包 包 包

そろり子 そろり子 そろり子 そろり子

鴨 鴨 鴨 鴨

たんご たんご たんご たんご

揚げ 揚げ 揚げ 揚げ

鴨 鴨 鴨 鴨

たんご たんご たんご たんご

和物 和物 和物 和物

さんご さんご さんご さんご

たんご たんご たんご たんご

者 者 者 者

湯煮 湯煮 湯煮 湯煮

小鳥 小鳥 小鳥 小鳥

出 出 出 出

青 青 青 青

椒 椒 椒 椒

の の の の

生栗 生栗 生栗 生栗

あつび あつび あつび あつび

さんご さんご さんご さんご

汁 汁 汁 汁

煮物 煮物 煮物 煮物

包 包 包 包

そろり子 そろり子 そろり子 そろり子

鴨 鴨 鴨 鴨

たんご たんご たんご たんご

揚げ 揚げ 揚げ 揚げ

鴨 鴨 鴨 鴨

たんご たんご たんご たんご

和物 和物 和物 和物

さんご さんご さんご さんご

たんご たんご たんご たんご

者 者 者 者

湯煮 湯煮 湯煮 湯煮

小鳥 小鳥 小鳥 小鳥

出 出 出 出

青 青 青 青

椒 椒 椒 椒

の の の の

生栗 生栗 生栗 生栗

うんこのことすうもと銅をくし
 うそすい煮るて○の鯛がわ
 けろ子とくたうすまうゆ
 くてびげ今と出へる鯛も子
 も入ててりて出とめまじ
 ていあし○そまがこいゆうこ
 せんさざざこくゆにそら
 まうゆと出と○あんう
 汁ういそらあろ一切てか
 も身とも少湯へ入るこころ
 時あけて水もろく其後酒
 をけ置と汁少立んこ
 魚を入時 鳥 ほうかんがも
 つます 物 うづろそま
 野菜 ふきうどまづあらさ
 りうまんそう。こをふさぬ
 ぶらさ。まごがう。けいぐ
 うこご。たんが。えん早。水
 煮うろさのめうがひす

正月 雑書

煮漬物

重徳 じそひ 推
 小串 川 ぬは ぶけ

きんかん じんかん かりぬ
 くらわぬ ちひんぬ ころなけ

債板丹 ちちうた 聖がり
 みのいも 長いし 板 甲あり

う ぶ ちめけ ぶ ぶ
 ちめけ ちめけ ちめけ

組重 玉子 ちひ
 ねり ねり ねり

生貝 さんご ちひ
 せんかい せんかい せんかい

白炙 ちちうた 小串 ひんぬ
 ばい ちちうた 小串 ひんぬ

小串田系 ちちうた ちひ
 こ串田系 ちちうた ちひ

車あひ 小串 白炙 ちひ
 くるまあひ 小串 白炙 ちひ

拾てんぐ 小串 ちひ
 ちてんぐ 小串 ちひ

押玉子 押玉子
 おし玉子 おし玉子

精進 膾炙人口
 料理 大さく
 大さく 大さく
 大さく 大さく

大さく 大さく
 大さく 大さく
 大さく 大さく

大さく 大さく
 大さく 大さく
 大さく 大さく

大さく 大さく
 大さく 大さく
 大さく 大さく

大さく 大さく
 大さく 大さく
 大さく 大さく

大さく 大さく
 大さく 大さく
 大さく 大さく

大さく 大さく
 大さく 大さく
 大さく 大さく

大さく 大さく
 大さく 大さく
 大さく 大さく

大さく 大さく
 大さく 大さく
 大さく 大さく

大さく 大さく
 大さく 大さく
 大さく 大さく



Handwritten notes and a circular stamp at the bottom left of the page.

